

第58回全国国際教育研究大会長崎大会

大会テーマ

「今、この時代に、世界に目を向け、
何ができるのかを考えよう」



会期	令和元3年8月26日(木)
会場	学校法人奥田学園 創成館高等学校(長崎県諫早市貝津町621番地)
主催	全国国際教育研究協議会
共催	独立行政法人 国際協力機構(JICA) 特定非営利活動法人 全国国際教育協会 九州ブロック高等学校国際教育研究協議会
主管	長崎県高等学校国際教育研究協議会
後援	外務省 文部科学省 独立行政法人国際交流基金 一般財団法人日本国際協力センター(JICE) 公益社団法人青年海外協力協会 一般社団法人長崎国際観光コンベンション協会 公益財団法人日本教育公務員弘済会長崎支部 長崎県教育委員会

目 次

開催要項	1
開催形態の変更について	2
弁論大会（英語・日本語）及び研究発表会の審査員一覧	4
2021 弁論大会（英語・日本語）に関する細則	6
第4 1回英語弁論大会・第2 1回日本語弁論大会 発表者一覧	9
英語弁論大会 原稿	10
日本語弁論大会 原稿	28
2021 国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会に関する細則	38
第10回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会 発表者一覧	40
発表概要	41
教職員による研究発表 発表者一覧	62
発表概要	63
来賓・大会役員・事務局名簿	73
JICA 地球ひろば便り	74

第58回全国国際教育研究大会長崎大会

「今、この時代に、世界に目を向け、何ができるのかを考えよう」

1 大会趣旨

この1年半、新型コロナウイルス感染症の世界規模での蔓延に伴い、私たちの周りでも不要不急の外出を自粛する“Stay Home”が日常生活の合い言葉となり、感染拡大と経済活動の回復の狭間で多くの方々の苦悩を伺います。ビジネス社会においては「テレワーク」や「オンライン会議」が普及し、学校ではICT機器を駆使した「遠隔授業」の導入と研究が必要不可欠なものとなった反面、同僚や友人とアクティブに議論し問題を解決する方策を見つけ出すといった、これまで培ってきた課題解決のためのプロセスにも変化が求められています。テレビやインターネットでは、国内のみならず海外諸国の感染者数が毎日ニュースで報告され、ワクチンの接種開始と共に「ワクチン格差」という言葉も登場しました。また、指導者の交代により対外政策が大きく変わった国、クーデターやテロなど情勢が不安定で人々が生命の危険に直面しながら日々の生活を強いられている国、異常気象や気候変動などにより引き起こされる災害にあえぐ国など、日々刻々と変化する世界情勢の中で私たちが生きていくためには、これまで以上にグローバルな視点に基づいた思考を一人一人がしなくてはならない時代になったと言えます。様々な不安要素が絡み合い、未来が極めて予想しづらいこの時代だからこそ、文化や言葉の壁を乗り越えて、世界の人々が協働し共存するためには、「〇〇ができない。」ではなく「何ができ、どう関わるか」を考え行動を起こすことが私たちに求められています。

長崎は古くから外国との貿易の窓口として発展してきた都市です。日本と異なる文化圏の人々と交流し、外国の文化を日本の伝統文化と融合させた独特な雰囲気が街の至る所で感じられます。また、広島と並び、世界で唯一被爆を経験した都市でもあります。平和の鐘が鳴るこの長崎の地に高校生が集い、国際理解やSDGsに関わる諸問題解決について提案や実践研究報告を行い、交流を深められることはかけがえのない機会です。長崎大会が地域・全国の国際教育に寄与し、高校生が積極的にこれからの世界に関心を寄せ、「今、何ができ、何をすべきなのか」を熱く議論できる場であることを願い、本大会のテーマを設定しています。

- 2 主催 全国国際教育研究協議会
- 3 共催 独立行政法人国際協力機構 特定非営利活動法人全国国際教育協会
九州ブロック高等学校国際教育研究協議会
- 4 主管 長崎県高等学校国際教育研究協議会
- 5 後援 外務省 文部科学省 独立行政法人国際交流基金
一般財団法人日本国際協力センター（JICE） 公益社団法人青年海外協力協会
一般社団法人長崎国際観光コンベンション協会
公益財団法人日本教育公務員弘済会長崎支部
長崎県教育委員会
- 6 会期 令和3年8月26日（木）から~~8月27日（金）~~まで（コロナ感染拡大のため変更）
- 7 会場 ~~長崎ブリックホール国際会議場（長崎県長崎市茂里町2-38）~~
~~☎ 095-842-3782（JR浦上駅より徒歩5分）~~
- 8 参加対象 全国国際教育研究協議会加盟校の教職員および生徒
第58回全国国際教育研究大会長崎大会に出場する生徒・引率者および保護者
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関心のある教職員・生徒・保護者等
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関わる関係団体・企業等の担当者等
国際ボランティア等に関係する教職員・生徒・担当者等

第58回全国国際教育研究大会長崎大会における

高校生英語及び日本語弁論大会、ならびに国際理解研究発表会の開催形態の変更について

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う、東京・沖縄での緊急事態宣言の延長及び新たに4府県での宣言など猛威をふるう感染症はとどまる気配がありません。大会事務局と全国理事で慎重に検討した結果、本大会における英語・日本語弁論大会及び国際理解研究発表会は対面では行わず、弁論及び発表を事前に録画・提出していただき審査をする形態に変更いたします。本来なら全国から発表者と多くの参観者にお集まりいただき、盛大に開催したいところではありますが、全国で1日の感染者数が1万人を越える深刻な状況下での大会開催ということをご理解いただき、録画による審査への変更にご協力をお願いいたします。

- 1 期 日 令和3年8月26日(木) ※1日のみの開催となります
- 2 場 所 学校法人奥田学園 創成館高等学校 大会議室(長崎県諫早市貝津町621番地)
- 3 実施形態 事前に録画し提出された弁論を審査員が視聴し、合議の上審査を行う
その様子はYouTubeで視聴者限定ライブ配信される

< 当日のタイムスケジュール > ※8月26日(木)のみの開催になります。

- | | |
|--------|---|
| 9:00～ | 審査員打ち合わせ(英語弁論・日本語弁論、生徒研究発表) |
| 10:00～ | 開会宣言(大会実行委員長) YouTubeライブ配信開始
全国国際教育研究協議会会長挨拶 |
| 10:10～ | 英語弁論大会審査員紹介 |
| 10:15～ | 第41回英語弁論弁論大会
(3名の弁論終了後、審査員による合議) |
| 10:45～ | 弁論再開 |
| 11:30 | 英語弁論大会終了 |
| 11:45～ | 日本語弁論大会審査員紹介 |
| 11:50～ | 第21回日本語弁論大会
(3名の弁論終了後、審査員による合議) |
| 12:35 | 日本語弁論大会終了
～ 昼食 ～ |
| 13:10～ | 英語・日本語弁論審査委員会 |
| 13:15～ | 教員研究発表紹介 |

- 1 3 : 2 0 **教員研究発表 1・2**
- 1 4 : 3 0 ~ 生徒研究発表会審査員紹介、審査内容紹介
- 1 4 : 3 5 ~ **第 1 0 回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会**
 (3 団体終了後、審査員による合議)
- 1 5 : 4 0 研究発表会終了
- 1 5 : 4 0 ~ 生徒研究発表審査委員会
- 教員研究発表 3・4**
- 1 6 : 3 0 審査結果発表 (英語弁論・日本語弁論・研究発表)
 講評 (詳しい講評は大会後全国国際研HPに掲載)
- 1 6 : 5 0 全国国際教育研究協議会会長挨拶
 閉会宣言 (大会実行委員長) YouTube ライブ配信終了

4 研究発表者等

(1) 生徒研究発表

石川県立金沢商業高等学校
 福井県立福井商業高等学校
 神奈川県立麻生(あさお)高等学校
 兵庫県立小野高等学校
 宮崎県立宮崎農業高等学校
 (長崎県) 純心女子高等学校

(2) 教職員研究発表等

愛知県立杏和高等学校 田中克佳 先生
 愛知県立刈谷北高等学校 山本孝次 先生
 宮城県仙台二華高等学校 石森広美 先生
 兵庫県立洲本実業高等学校 三宅孝徳 先生

5 審査員

(1) 弁論大会 (英語・日本語)

- ①外務省国際協力局審議官 岡田 恵子 様
- ②文部科学省初等中等教育局 教育課程課教科調査官 情報教育・外国語教育課教科調査官
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官・学力調査官 富高 雅代 様
- ③独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長 吉成 安恵 様
- ④一般財団法人日本国際協力センター (JICE) 九州支所長 内山 選良 様
- ⑤長崎県教育庁高校教育課 指導主事 中村 陽介 様
- ⑥長崎外国語大学外国語学部現代英語学科 教授 マーク・ティーマン 様
- ⑦長崎県高等学校国際教育研究協議会副会長 長崎県立奈留高等学校長 釘島 正智

(2) 研究発表大会

- ①独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長 吉成 安恵 様
- ②一般財団法人日本国際協力センター (JICE) 九州支所長 内山 選良 様
- ③全国国際教育研究協議会副会長 東京都立六郷工科高等学校 竹山 哲司 様
- ④東京都国際教育研究協議会事務局長 東京都立浅草高等学校 吉野 翔子 様
- ⑤長崎県高等学校国際教育研究協議会会長 創成館高等学校長 奥田 修史

第 58 回全国国際教育研究大会長崎大会の審査員一覧

弁論大会（英語・日本語）

- ① 外務省国際協力局審議官 岡田 恵子 様
- ② 文部科学省 初等中等教育局
教育課程課 教科調査官
情報教育・外国語教育課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター
教育課程調査官・学力調査官 富高 雅代 様
- ③ 独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長 吉成 安恵 様
- ④ 一般財団法人日本国際協力センター（JICE） 九州支所長
内山 選良（うちやま えりと） 様
- ⑤ 長崎県教育庁高校教育課 指導主事 中村陽介 様
- ⑥ 長崎外国語大学外国語学部現代英語学科 教授 マーク・ティードマン 様
- ⑦ 長崎県高等学校国際教育研究協議会副会長 長崎県立奈留高等学校長 釘島 正智

研究発表大会

- ① 独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長 吉成 安恵 様
- ② 一般財団法人日本国際協力センター（JICE） 九州支所長 内山 選良 様
- ③ 全国国際教育研究協議会副事務局長 東京都立六郷工科高等学校 竹山 哲司 様
- ④ 東京都国際教育研究協議会事務局長 東京都立浅草高等学校 吉野 翔子 様
- ⑤ 長崎県高等学校国際教育研究協議会会長 創成館高等学校長 奥田 修史

第 41 回

高校生英語弁論大会

第 21 回

高校生英語日本語弁論大会

2021 高校生英語弁論大会・高校生日本語弁論大会に関する細則

1 高校生英語弁論大会

1 目的

将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を英語または日本語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。

2 弁論内容・資格等

(1) 弁論内容

弁論内容は、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。国際協力、国際交流などに関する生徒自身の体験（授業や部活動などで学んだことや主体的に調査研究した事柄も含む）を通じて考えたことや、地球環境や世界平和などに関して自分の考えを英語で弁論することが望ましい。在外経験や留学体験のある生徒は、その経験や感想にとどまらず、自分の経験と諸問題などと関連させた弁論を行うことが望ましい。

(2) 参加資格（以下のすべての条件を満たしていること）

- 1) 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校の生徒
- 2) 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
- 3) 英語を母語としない生徒。または日常生活で英語を使用していない生徒。在外経験は特に問わない

(3) 弁論時間

- 1) 4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象とする。

(4) 発表方法

- 1) 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
- 2) 発表時には、原稿は持ち込まないこととする。
- 3) 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。

3 弁論大会審査基準

- (1) 論旨・態度・音声の観点を踏まえ、スピーチを総合的に審査する。
- (2) 各審査委員の順位を集計し、それを基に審査委員で協議し最終順位を確定する。

【論旨70点】・トピックの選択(10点)・文章構成(20点)・内容の独創性(20点)・説得力(20点)
【態度15点】・姿勢(5点)・視線(5点)・熱意(5点)
【音声15点】・声の大きさ(5点)・発音(5点)・流暢さ、抑揚、リズム(5点)

【 論旨 (content) (70) 】

- ・トピックの選択 (choice of topic) (10)
- ・文章構成 (organization) (20)
- ・内容の独創性 (originality) (20)
- ・説得力 (persuasiveness) (20)

【 態度 (attitude) (15) 】

- ・姿勢、表情 (posture) (5)
- ・視線 (eye contact) (5)
- ・熱意 (enthusiasm) (5)

【 音声 (voice) (15) 】

- ・声の大きさ (volume) (5)
- ・発音、明瞭さ (pronunciation) (5)
- ・流暢さ、抑揚・リズム (fluency, intonation, rhythm) (5)

(3) 弁論時間：

- 1) 4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象とする。

2) 計時・時間の表示

- ① 計時は、生徒の第1声から開始する。計時は、正確さを期すために、3つ以上の機器で計時する。
- ② 4分、4分30秒、5分の時点で時間を示す。

3) 4分30秒以下及び5分以上の減点基準等

- ① 後20秒(4分10秒以上～5分20秒未満)は減点しない。
- ② 後20秒以上40秒未満は、各審査員の点数から1点減点する。
- ③ 後40秒以上60秒未満は、各審査員の点数から2点減点する。
- ④ 後60秒以上は、各審査員の点数から3点減点とする。60秒を超えても続ける場合は、ベルを連呼して発表を中止してもらう。

4) 審査時間についての申し合わせ事項

- ① 各弁論発表の直後に、審査および用紙記入のための時間を設ける。司会進行側は、審査員の審査の状況を確認しながら、弁論者の入れ替わりおよび紹介のタイミングを調整し、進行する。
- ② 3名の発表後に、審査のすりあわせを行う。

4 審査員および表彰

(1) 審査員 (◆名称を「審査員」「審査員長」に統一する。)

1) 英語弁論大会審査員は以下のメンバーを基準とする。

- ① 外務省 ② 文部科学省 ③ 国際協力機構 ④ 国際交流基金 ⑤ 日本国際協力センター
 - ⑥ 実施県の教育委員会等 ⑦ 英語を母語とする ALT 等
- 審査員は外部の審査員のみとする。

2) 審査員の中から「審査員長」を選出する。

3) 審査委員会に、「国際教育研究協議会全国理事」が入り、審査会の進行・運営を行う。

(2) 表彰

外務大臣賞	(1名)
文部科学大臣賞	(1名)
国際協力機構理事長賞	(1名)
国際交流基金理事長賞	(1名)
日本国際協力センター理事長賞	(1名)
全国国際教育研究協議会会長賞	(若干名)

<<内部の確認事項>>

○総合得点により賞を授与する。今までの経緯は1位外務省、2位文部科学大臣賞を授与することが多かった。両者が拮抗している場合は、弁論内容によって授与する賞について審査する。

3位国際協力機構(JICA)。4位5位については国際交流基金、日本国際協力(JICE)を決める。

上記の内容については、各機関へ審査員依頼の際と弁論原稿を送付する際に確認する。

○外務大臣賞、文部科学大臣賞の大臣賞については、ともに大臣賞なので同等。

5 全国大会出場の人数確定について

大会開催県代表1名(1名)+各地区代表(東北1、関東2、東海1、近畿1、四国1、九州1、中国1=8名)の5名以上9名以内とする。

*地区の加盟県数:東北4、関東甲信越静岡10、東海北陸5、近畿6、四国中国5、九州3、

*欠員が出た場合は、大会事務局と全国事務局とで協議し、人数の補充等を行う。

- ① 大会開催地区から+1
- ② 大会開催県から+1名

6 大会結果

大会結果については、大会直後、HP等で報告する。また、全国事務局から各県会長及び事務局長に連絡する。

2 高校生日本語弁論大会

1 目的

将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を英語または日本語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。

2 弁論内容・資格等

(1) 弁論内容

弁論内容は、国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。単なる感想や異文化体験でなく、本人の体験を通して、態度や行動に変容があり、多文化共生のための国際相互理解を深める視点や地球的な視点で述べられている弁論が望ましい。

(2) 日本語弁論大会参加資格

- 1) 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校の生徒または留学生
- 2) 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
- 3) 加盟校に在籍する外国籍の生徒または日本語を母語としていない生徒または日常生活で日本語を使用していない生徒。在日期間が8年以内の生徒

(3) 弁論時間

- 1) 4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象とする。

(4) 発表方法について

- 1) 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
- 2) 発表時の原稿の持ち込みは問わない。
*日本語弁論大会も原稿を持ち込まないことを原則とするが、在日期間が短い生徒の参加も考えられるので、「問わない」と表現した。
- 3) 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。

3 弁論大会審査基準 英語弁論大会に準ずる。

4 審査員および表彰

(1) 審査員

- 1) 日本語弁論大会審査員は以下のメンバーを基準とする。
①外務省 ②文部科学省 ③国際協力機構 ④国際交流基金 ⑤日本国際協力センター
⑥実施県の教育委員会等
- 2) 審査員の中から「審査員長」を選出する。
- 3) 審査委員会に、「国際教育研究協議会全国理事または大会実行委員」が入り、審査会の進行を行う。

(2) 表彰 英語弁論大会に準ずる。

5 全国大会出場の人数確定について 英語弁論大会に準ずる。

6 大会結果 英語弁論大会に準ずる。

第41回高校生英語弁論大会・第21回高校生日本語弁論大会 発表者一覧

部門	氏名	ブロック等	学校名	学年	演題
英語	関田 真愛	関東	佐野日本大学高等学校	3	The Future of Japan
	セキタ マナ	(栃木県)	サノニホンダイガク		
	矢野 紗彩	九州	宮崎学園高等学校	3	Living Together
	ヤノ サアヤ	(宮崎県)	ミヤザキガクエン		
	篠原 奏音	近畿	兵庫県立姫路西高等学校	2	Never Be Powerless
	シノハラ カノン	(兵庫県)	ヒメジニシ		
	中島 和香奈	九州	鎮西学院高等学校	2	The Magic of Cultural Differences
	ナカシマ ワカナ	(長崎県)	チンゼイ		
	江口 春菜	関東	茨城県立竹園高等学校	3	The Key to Stopping Modern Slavery
	エグチ ハルナ	(茨城県)	タケゾノ		
	内ヶ崎 大斗	東北	宮城県仙台二華高等学校	3	International Cooperation for the Future
	ウチガサキ タイト	(宮城県)	センダイニカ		
	北浦 マリア	四国	徳島県立徳島商業高等学校	3	A More Diverse Society
	キタウラ マリア	(徳島県)	トクシマシヨウギョウ		
	助田 佳蓮	東海北陸	石川県立金沢二水高等学校	2	My Dream
	スケダ カレン	(石川県)	カナザワニスイ		
林 七菜子	中国	島根県立隠岐島前高等学校	2	Is "Perfect" Perfect?	
ハヤシ ナナコ	(島根県)	オキドウゼン			
日本語	河 恩珍	関東	翔凜高等学校	3	プラスチックバンデミック
	ハ ウンジン	(千葉県)	ショウリン		
	強 蘭茜	東北	仙台育英学園高等学校	2	否定されても乗り越える 信念を貫け
	キョウ ランセイ	(宮城県)	センダイイクエイガクエン		
	柏木 菜林	関東	柏市立柏高等学校	3	太棒了(たいばんら)～私の前途を照らす光～
	カシワギ マリン	(千葉県)	カシワシリツカシワ		
	LAMA YESHI・PALDON	九州	宮崎学園高等学校	2	文化と言葉を繋ぐ
	イシ・パルドウン・ラマ	(宮崎県)	ミヤザキガクエン		
	鄭 明子	関東	工学院大学附属高等学校	2	違うようで似ている私たち
テイ アキコ	(東京都)	コウガクインダイガクフゾク			

The Future of Japan

栃木県佐野日本大学高等学校 3年 関田 真愛

Recently, we have seen many more foreigners in our neighborhoods: at the station, at convenience stores, and in our workplaces. While some are residents, many are “International technical trainees” - foreigners who come to Japan to learn job skills and return to their home country. They come with the promise of being able to get useful skills in Japan, and to get better jobs or start their own business when they return home with what they learned. These days in Japan, we often hear about their news. Do you know why they have been paid attention to recently?

The problem is that this style of employment may lead foreigners to various problems. They come to Japan thinking they will be trained in useful skills in return for reduced pay and long working hours, but instead they end up moving boxes for 10 hours a day for pay lower than a Japanese citizen would be paid. The training they were promised by these “black companies” was just a trick to exploit these foreigners until their visa is up and they are sent home with a fraction of the pay they should have earned for their labor. Difficult labor and long working hours leads to health problems – ones Japan doesn’t have to worry about. There was never a chance for them to learn new skills, because the business knows they will leave – so why waste time training them? Everyone knows they have to go home, as there is no possibility for them to immigrate to Japan.

Why does such a thing happen? Why do we allow such programs to exist? Because we still think “foreigners can't be Japanese. They can't become part of our society.” Isn't that a crazy opinion? We want the benefits of their labor to help our industries, but have such a low opinion of them that we won't let them grow roots here, even as our population decreases and villages are abandoned.

People should receive the same dignity regardless of their nationalities. Imagine you work hard in other country everyday but people around you don't feel good about you. That makes you uncomfortable with your life. Don't you feel lonely, feeling like you are not a member of that community? This exists in this country, too. Do you want someone to feel like that here in Japan? No, I don't. That is not the Japan I want to live in. Eating sandwiches from convenience stores, fish sold at markets, or buying goods “made in Japan” that were made or processed by people we take advantage of, look down on, then toss away simply because their race or culture is deplorable. Is it worth having cheap goods by stealing from those we claim to be helping?

Technical trainees have already been part of our society. We need them and they need us. So why don't we help each other? To make the atmosphere welcoming to trainees, we must start changing our way of thinking. We can no longer say "Japan is only for Japanese." We already depend on food from around the globe and cheap overseas labor in our factories. We must start saying "Japan is for the people who live here."

The idea that workers and habitants are in different positions is out of date. We can make the community of mutualism for ourselves and the next generations. It is high time to think about what it means to be a citizen of Japan. Our decisions will create the future Japan. The future of our culture and nation depends on it.

【発表要旨】

多くの外国人技能実習生が低賃金で単純作業に従事させられ、長時間労働を強いられた上に健康を害し、帰国を余儀なくされる等、苦しい状況にある。少子高齢社会で人口が減少し、様々な仕事を担う働き手が必要な状況であるにもかかわらず「外国人は日本人にはなれない」と見下す気持ちがこの制度が存続する原因である。しかしそのように「労働者の外国人」と「住民（日本人）」と区別する考えは時代遅れである。日本はそこに住む人たちのための場所であり、日本に住む人としての意味を考え始める必要がある。

I know most of you are Japanese and you are leading a rather comfortable life here in Japan. But imagine you were born and raised in a poor country and came to Japan to earn money to support your family back home. What would bother you most? What problems do you think you would have?

The other day, some articles in the local newspaper caught my eye. They were part of a series of articles titled “Foreign Workers are Now!” They contained a number of stories depicting the current situation of foreign workers in Japan. Stories of people who experienced violence and verbal abuse, of people who are working while enduring unfair wages and harsh working conditions, and of those who have gone missing. Is this really the current situation in Japan, a country where many people are calling for globalization and diversity? I could hardly believe my eyes.

Mr. Luan from Vietnam told me his own story in my interview. He told me how fascinating a country Japan was for him. He came to Japan and worked as a technical intern trainee for three years, struggling to adjust to the new environment. I learned there is certainly a harsh reality that is hard for me to imagine. Foreign workers come to Japan with hopes and dreams, but most of them have a hard time settling in Japanese society. After finishing the interview, I was so ashamed of my ignorance. In my hometown, Miyazaki, the number of foreign workers has been increasing. However, I know almost nothing about them and have made no effort to interact with them. I also learned how immature our society is toward accepting workers from other countries.

I believe that to help improve the current situation for foreign workers a strong community support is a must. I believe this because I realized the importance of communities through my own experience. At the beginning of my study abroad in Brisbane, Australia, I had a hard time. At school, I was the only Japanese person in my class. There were many times when I didn’t understand what was being said. However, to my request, most people around me were happy to explain anything I didn’t understand. My fears and anxieties gradually disappeared. When I started introducing Japanese culture to them, such as showing pictures of lunchtime and cleaning activities at school, they got really interested, usually responding with “Wow, Amazing!” I became very proud of my identity as a Japanese.

My homestay was with an Egyptian host father and a Filipino host mother, both of whom were immigrants. They spent hours answering questions about my concerns and cultural differences, based on their experiences as immigrants. In addition, I was able to communicate with many people through surveys and volunteer activities, which made me feel like a member of the local community.

Looking back on my experience in Brisbane, I think I could not have accomplished all I did without the support of the community around me. If I hadn't been able to gain their understanding, I might not have been able to overcome the language and cultural barriers. What about Japanese society? Are we Japanese not seeing foreign workers only as convenient "Labor Power"? Are we not imposing our normal way of thinking on them? Are we not choosing not to get involved with them? Such attitude from us can make it hard for the 2.8 million foreigners in Japan to live here. What is needed is to imagine their backgrounds and deepen our understanding of them. Only through learning about each other's culture and acknowledging each other's differences will we be able to realize the existence of diversity and live in harmony. We need to have more opportunities to interact with each other. Mr. Luan, the man from Vietnam I talked about earlier, is now picking up the SOS calls from foreign workers. He is now working hard to create an environment where foreign workers can easily ask for help. The fact that there are many other people like him willing to make a difference makes me relieved.

Now is the time to learn about the real meaning of diversity. Now is the time we should take action to make our society comfortable to live in for both Japanese and foreigners. As the first step towards coexistence, why don't we start communicating with the people around us? I believe that a single small connection has the potential to become the catalyst for big social change.

【発表要旨】

現在日本にいる外国人労働者は172万人。過酷な環境ばかりが目立って悲しい気持ちにさせられることも多いが、宮崎で働くベトナム人男性へのインタビューを通して希望が見えた。まずはコミュニティーづくりが大切だ。自分自身の留学の体験を基に、共生社会実現のためにわたしたちはどうあるべきかを考えた。

“Ensure inclusive and equitable quality education and promote life-long learning opportunities for all.”-This is proposed by the United Nations as the sustainable Development Goal 4 towards quality education. Going to school and attending classes every day is not special, just my routine. However, according to the United Nations, in 2018, about 260 million children were still out of school. That is nearly one fifth of the global population in my age group. Additionally, more than half of all children worldwide are not meeting minimum proficiency standards in reading and mathematics.

In April 2020, COVID-19 pandemic spread across Japan and I was forced to stay at home for two months. I still remember the time when I had so much anxiety about not going to school. Now, I go to school every day and attend classes with my classmates, join club activities and engage with my teachers and peers. I cannot appreciate my blessed situation enough because I know how much learning matters to us.

Three years ago, I was able to volunteer at a shelter house in Seattle. There, victims of domestic violence, the homeless and refugee families lived together and had access to supportive services. I conducted a “chara-ben” lesson to the children living there. Before the lesson, I was so anxious, wondering, “What are they like?” or “Will they care about my lesson or be bored?”. All those fears fell on me on whether I could connect with these kids. However, once I met them, my anxiety was gone. They were just the same as me. They were in the same generation as me. They listened to my lesson enthusiastically even though my English was not clear enough. As the lesson went on, they looked happy and motivated. We got closer, asked each other questions and laughed together. We shared such a precious moment together through the chara-ben lesson, through learning. I felt ashamed of myself for having had anxiety. Through this experience, I realized that the willingness to learn something connects us and brings us vivid curiosity. In turn, newfound curiosity drives us to learning itself, which enriches our everyday life. Education truly makes a profound difference.

Millions of children remain deprived of educational opportunities as a result of social, cultural and economic factors. Education is empowering and one of the most powerful tools. Education can make these children, who are often disregarded and neglected, participate fully in society.

As a high school student in Japan, making an action in a global scale is difficult. But I can learn more about the current situation. I can keep myself open to the global issues. I can enjoy learning at school. I can encourage and help my classmates. Even though my steps might be tiny, I believe I am never powerless.

Education is everyone's right. It gave me power to give a chara-ben lesson. Therefore, I believe that once we can achieve quality education, all children will also never be powerless.

【発表要旨】

世界の子どもの約 2 億 6 千万人が学校に通えない現状がある。去年の休校期間、不安で過ごした経験から、今、学びの大切さを実感し、登校できる毎日に感謝している。米国で行った活動では、困難な生活環境に身を置く子どもたちと学びを通してつながることができた。学びは好奇心を生み、生活を豊かにする。私ができることは小さいが、日々を大切にし、世界に関心を抱き続けることが一歩となる。私は、微力ではあるが無力ではない。

Have you ever thought about “cultural differences”?

Three years ago, I visited Italy as an ambassador for my hometown. I stayed in the home of a girl named Adriana for a few days, and visited her school. She is the same age as me. Today, I would like to reflect on my friendship with Adriana and the experiences I had while living in her home as I explain a realization I had about cultural differences.

While I was on the way to my host family’s house, I felt anxious, because I was going to stay in a foreign house alone. I only knew my host sister’s name and gender. Also, I was worried about whether we could go beyond our cultural differences to become good friends, because I had already been surprised at some differences of culture during the sightseeing in Rome.

However, since the very first day of my stay in Adriana’s house, we became great friends like true sisters. What made us have such an intimate relationship in spite of our different languages and cultures? I think it’s “cultural differences” themselves. Maybe you are thinking there should be a contradiction to my words, but this is what I learned from the time I spent with her.

I experienced many aspects of Italian culture with Adrianna. We cooked homemade pizza, played Italian card games, and even went to Adriana’s cousin’s birthday party together. On holidays, we took walks along the beach, and played soccer in the garden. At her school, we listened to presentations on Italian culture, and tried tongue twisters in each other’s language. When I was surprised at cultural differences, Adriana and her friends explained them to me politely, and said, “How is it different in Japan?” They tried to teach me about Italian culture, and tried to learn about Japanese culture. I greatly admired them and I came to do as they did. In this way, we learned so much about each other’s culture. Discovery of cultural differences gave us joy, and it made the distance between our hearts closer.

Until then, I had thought “cultural differences” would only prevent us from communicating with foreigners, but they can actually bring our hearts closer together.

It is true that cultural differences may sometimes lead to tragedies like ethnic conflicts or bullying. On the other hand, they can create beautiful friendships between people.

What makes some cultural differences positive? It’s the attitude of acceptance and the desire to use the differences to get to know others.

Each culture has its own history, ingenuity, and national character. However, the differences between two countries are not necessarily opposed like water and

oil, but are more like different colors of water color paints that create other beautiful colors by being mixed together. People who fight and bully because of cultural differences, consider them to be obstacles, and refuse to accept them. If they could understand the beauty of cultural differences, they would try to get to know others, and gain joy, friendship, and bonds. This is the true treasure created by cultural differences. I'm so fortunate to have gotten such a precious gift from cultural differences with Adriana, her family, and friends in Italy. I'm very grateful to them.

Maybe there are some foreigners around you, and you will meet other foreigners in the future. What will you get from the cultural differences? Each of our actions is a key to change our future world.

I hope my speech will stay in someone's heart. Thank you for listening.

【発表要旨】

この世界には、それぞれの地域で創られ、育てられてきた多くの異なる文化が存在しています。これらの文化の違いを皆さんはどのように捉えていますか？「外国人との間の壁のような存在」だというイメージもあると思います。私は3年前、イタリアでのホームステイで文化の違いを目前にし、それに対するイメージが、ネガティブなものから大きく変わりました。グローバル化が進み、文化が入り混じる現代に生きる私たち。「文化の違い」を違う視点から見つめ直してみませんか？

The Key to Stopping Modern Slavery

茨城県立竹園高等学校 3年 江口 春菜

A dark room; locked door. You sit in fear. No way of escape. You're in a prison. You're a slave. You're a victim of human trafficking. Imagine what that is like. You have no freedom. Your heart is dying, and your dignity has been taken away forever. You are truly without hope. Human slavery. For normal people, human slavery is something from the distant past. Wrong. Human trafficking is everywhere.

About 40 million people are victims of human trafficking every year. But, this is only the number of detected cases. The real number is probably much higher. This is because human trafficking happens in the shadows. It's a hidden crime. More than half of all cases are girls and women, and 34% of victims are children. Children. The most common cases are women trafficked for sexual exploitation. But, men and boys are being used in increasing numbers for sexual exploitation and forced labor. In fact, forced labor has increased from 18 to 38% of cases.

Traffickers target people in vulnerable situations: people living in poverty, people affected by wars and disasters. And now, in the digital age, there is a new problem. Human trafficking used to happen by criminals approaching potential victims directly. But, the Internet has been integrated into this shadowy business and it has helped traffickers target more victims. With only one click, we can exchange the life of a human being. Just like if we were shopping for clothes. Another change is that human trafficking is happening more inside countries with victims not crossing international borders. Police data shows this is happening even in Japan where girls in the countryside are targeted by criminal gangs and forced to work as slaves or to be sexually exploited in other prefectures.

Education is the most effective way to solve this problem. In our school, as part of our English lessons, we do a Model United Nations activity. This year our topic is "human trafficking." We research the topic deeply and discuss possible solutions with each other. Every student should have this wonderful opportunity. One thing that I love about this activity is that we have to think - not from our own point of view - but from the point of view of the country that we are representing. I have been so surprised by how ignorant we were about this topic and about other international issues. That is why knowledge is the only way to solve this problem. By educating people about this hidden crime, we shine a light on the darkness.

Human trafficking is the third largest criminal activity in the world, behind only illegal weapons sales and drug trafficking. Human trafficking is not a small crime, but it doesn't get enough attention because it is unseen. The issue is getting even more urgent because of COVID-19. Sharp increases in unemployment motivate job seekers to take higher risks in their struggle to get out of poverty. But we can do nothing to solve this problem because we don't know anything about it. Let's be

honest. People in Japan don't know about this issue. I want every school to make Model United Nations a compulsory part of education. It doesn't matter if it is done in English or Japanese, in Japanese lessons or social studies. We need to increase young people's awareness of important issues. If we don't know, we can't act. Without education, there is no change, no justice, no lives saved. Education is our hope, the light that will guide us to a world without slavery.

【発表要旨】

人身売買とは、決して私たちから遠く離れた異国の問題ではない。インターネットの発達によって被害者は年々増加し、身近な問題となってきたのだ。解決策を見出す鍵となるのは教育であると思う。

International Cooperation for the Future

宮城県仙台二華高等学校 3年 内ヶ崎 大斗

International cooperation and support. Due to the spread of Covid-19, we don't see as many people out and about and these activities have been curtailed. So, I thought it is time for all of us to reconsider what real international cooperation and support are. When you hear these words, you probably think of developed countries delivering money and supplies to developing countries. But can such activities really be beneficial for developing countries?

My school has been engaged in international problem research with the aim of fostering global leaders. Our research focuses on water and poverty issues around the world, and I am particularly interested in rainwater harvesting in the communities of Tonle Sap Lake in Cambodia. Tonle Sap Lake is the largest freshwater lake in Southeast Asia and is home to more than one million people. As in tradition, they have used the lake water for their daily lives. But due to the deteriorating quality of the lake water, they have to buy bottled water. Their poor wages are used to buy bottled water, so they can never get out of poverty.

In order to break this negative cycle, I'm researching how to make rainwater harvesting more accessible to residents. If they can use rainwater for their daily lives, they will not need to buy bottled water and they'll live more comfortably.

At my school, we students have chances to go to Tonle Sap Lake every summer and winter for fieldwork. I was planning to go there last winter, but because of coronavirus, I was not able to go there. Therefore, I spoke to teachers and senior staff who have been there and found many problems.

Firstly, there was a lack of harmony between the needs of the local people and those of us supporting them. Sometimes we want to give them something, but they don't want it.

Secondly, there is the issue of customs that have taken root in the area. My predecessors were able to supply well water to use instead of rainwater. The well water was so dirty that some who drank it got sick, but once they got used to getting well water easily, they couldn't go back to the time-consuming task of collecting rainwater. It's easy to break people's habits if we do things based on our own values without knowing the local conditions deeply.

Last but not least, there's the issue of sustainability. I was so focused on how to make people an efficient rainwater-using device. But actually, we need to help people select the right materials themselves, build a rainwater collection system themselves, and maintain it themselves. Just giving them money and materials, without know-how, will be only a temporary solution.

Just imagine that you are a wealthy fisherman and next to you is a poor and hungry man. You can give the man a fish, but you can't keep feeding him

forever. The poor man who doesn't get a fish will starve again. Instead of giving him a fish, you have to teach him how to fish. In other words, I need to figure out how to teach people to collect rainwater and even how to expand the collection system throughout the community.

Successful support is support that is small but ongoing. Failures are activities that have the right goal but cannot be continued. When I think about helping people who are suffering somewhere in the world, I will try to gain my own "awareness" by experiencing the expressions on people's faces, the flow of time, and the sounds and smells of their cities. Through this "awareness", I want to create a system of support that is accepted by the local people and can be sustained. We can't just provide fish or fishing rods, we must teach how to fish.

【発表要旨】

国際協力、国際支援とは何だろうか。Covid-19 の世界的蔓延により人々の往来が減ったなか、このことについて改めて考えてみたい。私は、学校の課題研究活動において、お金や物資の供給は実は本当の国際協力にはなっていないことに気がついた。真の国際協力とは、相手のニーズを考えて自分の価値観を押し付けずに持続性のある支援を行うことである。私たちは、貧しい釣り人には魚や釣竿をあげるのではなく、魚の釣り方を教えるべきなのだ。

“Let’s hang out outside” One of my classmates came up to me and said with curious eyes and a blushing face in Japanese. I just nodded without saying anything because I didn’t know how to reply. Nodding was the only way I could reply to friends at that time because I hardly understood Japanese.

I came to Japan from Indonesia when I was 12 years old. I didn’t know any Japanese except hiragana and katakana. I didn’t understand any words teachers and classmates said and what was written in my textbooks. Can you imagine being in a world where you don’t understand any words? I was the only student who had come from a foreign country, so I was struggling every day and thought that I was the only one who suffered from such a situation.

However, now I know that there are many students like me in Japan. The Japanese government is expanding the acceptance of foreign workers and their families. However, we don't have sufficient systems in place to accept children. The burden of differences of language and lifestyle is significant, and there are many students who give up attending schools. The survey by the Ministry of Education found that nearly 20,000 foreign children in Japan may not have attended elementary and junior high schools in 2019.

We should not leave this problem unsolved. If we face and overcome this situation sincerely, our society will be a more attractive one. I hope we can think about the way to do this together.

First, we should consider Language support, especially those immediately after coming to Japan, they cannot keep up with their school studies. I often spent my days just sitting at my desk in the classroom waiting for the time to pass. I thought if there had been one more teacher sitting next to me and had supported me during lessons, I could have understood Japanese and fitted in class more easily. Also, I wish teachers had written hiragana alongside some Chinese characters, which was so tough to learn.

Second, support for their parents. Some parents also have difficulty understanding Japanese, so they can’t read letters from schools and they also do not know useful information such as the school attendance support system. Also, understanding the Japanese high school entrance exam system is difficult, I usually had arguments with my mother because she could not fully understand that system. From my experience, I think that there may be some parents who may not be able to make the right choices or decisions about their child’s academic course because of their language problems.

Furthermore, everyone needs to have knowledge about their culture and religion. Some children can't eat specific foods and some worship and need space

and time for that. Japanese students may feel different from that lifestyle and may try to alienate them. We should have education accepting a variety of cultural and religious backgrounds and respect diversity.

However, what cheers children up the most is that they can feel someone always cares about them. My classmates never left me alone. They never treated me like a foreigner, but treated me normally as a friend. They taught me how to read and write, using gestures and pictures. Can you imagine how happy I felt, how relieved I was, thanks to them? If you ever meet children from foreign countries, please talk to them first and try to know them. Gradually the distance between them get shorter and you can become real true friends. It's a wonderful thing to meet people whose culture and language are different. By interacting with them, you can have a wider field of view and make our society more diverse. So, let's do our part and make this place better and more accessible for everyone.

【発表要旨】

12歳でインドネシアから日本に来た私は、日本語がほとんど分からず、当時、大変な思いをした。現在、日本は多くの外国人労働者を受け入れているが、その子供たちを支援する体制が十分であるとはいえない。言語や文化の違いから、学校に行けなくなった生徒が大勢いる。自分自身の体験から、この問題をどのように解決すべきか考え、誰もが住みやすい多様性のある社会を目指したい。言葉の支援や文化・宗教の違いを受け入れ理解することは、もちろんだが、本当に彼らを元気づけるのは、誰かがいつも気にかけてくれているということを感じるのだ。当時の私のクラスメイトがしてくれたように。

My Dream

石川県立金沢二水高等学校 2年 助田 佳蓮

My dream is to create a peaceful world without stereotypes. There are plenty of stereotypes in the world. Some of us think foreigners do not speak Japanese well only because they “look foreign”. Others think women cook better than men because that is the role they are given. Stereotypes prevent us from learning new things. They also make it difficult to meet new friends and to accept new ideas.

Three years ago, some Chinese students came to my house for a home stay. We talked and laughed and learned a lot from each other. Since then, my life has become richer. They are very hard-working students and always encourage me when I feel lazy at school. We still keep in touch now. Good friends are like good books because they are windows to different cultures.

But, last year, when the Corona Virus Pandemic started, people around me said “The Chinese are bad.” “We can’t trust Chinese people.” However, these are all stereotypes. The overseas students who came to my house were all nice and honest. They helped me in many ways. There is no evidence that all Chinese people are bad. I have been to China several times and I met so many kind people there. On the bus, my grandmother was given a seat by a total stranger. Another time, when I was crying because my mom didn’t buy a toy for me, the shop owner kindly discounted it for us and also gave me candy for free. I was young but I remember all of these kindnesses. People sometimes think in stereotypes instead of looking at the whole picture. These unkind words hurt innocent people who have done nothing wrong. Especially now when we humans are facing this terrible disease, we should gather our strength together to defeat it. It would be a pity if we live in a global society but still struggle with stereotypes in our own community. It is time that we, 7 billion people, think about how to overcome this crisis. I am sure we can do it as long as we think globally, and act locally.

Stereotypes are based on gender, race, religion, nationality, and even blood types. Sometimes they can be escalated to discrimination, which has been a big problem around the world. My favorite tennis player Naomi Osaka has spoken out against discrimination many times. She printed the names of seven black Americans on the masks she wore during her tennis matches. The deaths of the seven were caused by discrimination. In this way, she protested that we should not judge people only by their skin color or any other physical characteristics. Naomi herself is a shy girl but she tries her best to overcome many obstacles, to practice tennis diligently and to face the media even with her mental disorder. She herself faces stereotypes every day. People tell her she is too loud or too outspoken, and that she should just focus on tennis. But she is brave and lets us

know that all humans are equal and no one should be ignored. I want to be a person like her and show my strong will to the world.

In 2025, Osaka will host the World Expo again. By that time, I will be a university student and plan to do some volunteer work for the event. I want to fix stereotypes by making personal connections with people. I also want to help the guests who visit Japan from around the world. I want our guests to know more about Japan and her people, especially her beauty and spirit. I hope they can enjoy their time here without being stereotyped. I also hope they can see more of Japan than what is on the surface. My dream is that we can build a better world if we look past stereotypes together.

【発表要旨】

偏見は、真実から、私たちを遠ざける。真実から目を逸らされれば、私に暖かい心を示してくれた人々を貶めることにさえ繋がります。私はかつて体感したのだ。善良な人々が、偏見により貶められてしまう可能性を思うと、心が痛んでならない。だから、私の夢は、偏見のない世界を創ることだ。また私は、異なるバックグラウンドを持つ他者との交流が、偏見を退けるとも体感した。この二つの経験を胸に夢を追う時、私には、見習うべき人がおり、すべきことがあると信じる。

Is “Perfect” Perfect?

島根県立隠岐島前高等学校 2年 林 七菜子

When I was 3 years old, I entered an international kindergarten and started learning English. I then moved up to a private Japanese all-girls elementary school, but changed schools and graduated from a Japanese public co-ed elementary school, where I started learning English on my own. Then, I entered a junior high school which had an international baccalaureate course, and when I was 14 years old, I studied abroad in Canada for 6 months. After I came back to Japan, I continued the IB program and graduated from the course a few months ago. Now, I’m a pioneer member of the 地域みらい留学 365, an island “study abroad” program where I go to school and live in a dorm on a very rural island.

When you hear this, what kind of girl do you think I am? How did you label me? The "English kid"? "Supergirl"? Or maybe, "perfect"? Well, thank you. But, that's not who I am. I mean, that could be a part of me maybe, but that doesn't explain every part of myself. These are labels, expectations put on me by others.

Let’s look at something a little more relatable. How many of you spend countless hours looking at other people’s social media accounts? Almost all of us, right? From the outside, everyone else looks like they have the perfect lives. They show us the perfect vacation photos, amazing dishes they’ve eaten, and smiling pictures of family and friends. We always try to show only the best parts of our lives for others to see, to show them we fit into the labels we’re told to strive for. On the inside, though, that image, those labels might not fit us at all.

On paper, my life might seem perfect, but it doesn’t mean that I was enjoying myself or was fitting into the spaces I was in. In my private elementary school, I experienced bullying that caused me to change schools, despite the expectation I would stay through university there. In my IB program, I was surrounded by driven classmates who have dreams they are pursuing, but for me, I don’t know my course yet, and I couldn’t see the meaning of studying so hard and being miserable while I did so when I had no direction, which is why I decided to do the island study abroad program. I’m not as perfect as it may seem.

And I’m not alone in this. So many others in my generation are struggling to understand their culture’s standard of perfection, and in that struggle, they are challenging what it means to be perfect.

We’re in an age of unprecedented access to others’ viewpoints through apps like Tik Tok, Twitter, and the like. Our countries and cultures are no longer the only thing we interact with on a daily basis. We can see what others think and value, and this leads us to rethink our own cultural norms, and in an increasingly difficult to navigate world, my generation is striving to find our own way, which is sometimes at odds with societal norms.

Think of the LGBTQ+ community. There are many countries around the world where they are not accepted as they are. I have an experience that made me realize this for myself. One day a few years ago, a close friend of mine came to me and asked, "Could you check this letter for me? I want to tell my parents something important." When I read his letter, I saw him trying to come out as transgender and apologizing for disappointing them. I said to him, "Why are you apologizing for being yourself? You should be honest and just tell them the truth without apologizing." I could see that he was feeling guilty and thought that being different from the label he was given was wrong. However, I didn't think that way. Since I was little, my family has hosted more than 70 people from around the world, about 15 of which were LGBTQ+. Being in this environment, I can easily accept various people as they are. Also, when I was in Canada, all the classrooms had a sticker to show that they support and accept LGBTQ+ people. This topic wasn't a taboo thing to talk about, and I could clearly see that the whole community accepted them as they are. If he were in Canada, he wouldn't feel guilty for being himself. I believe that we should make a society where everyone can be themselves proudly.

Moving forward, it's on us to define what "perfect" is for our lives, even if it contradicts what our cultures deem perfect. Cultural change can't happen unless we challenge it, and if we choose to be ourselves even when confronted with overwhelming opposition, that is an act of bravery. So, I encourage you to pick your own labels. Set your own expectations for your life. "Perfection" is subjective. Define what it means for yourself.

【発表要旨】

私たちは常に SNS や普段の生活を通して他の人に自分の「完璧」な姿を見せようとしているが、それは本当に自分が求めている姿なのだろうか、それとも私たちは世間が定義した「完璧」という枠に当てはまろうとしているのだろうか。海外留学やホストファミリーとして外国人を受け入れた経験を通して、周りが抱く固定観念に当てはまろうとしてきた私から抜け出して自分らしく生きることの大切さを知った。

プラスチックパンデミック

千葉県 翔凜高等学校高校 3年 河 恩珍

皆さん、こんにちは。千葉県の翔凜高校から参りました。韓国出身のハ・ウンジンです。本日はプラスチックパンデミックについてスピーチします。

最近一番の話題である新型コロナウイルスにより、世界は大きく変わりました。海外旅行などに制限があることはもちろん、多くの方が外食や集まりなどの軽い外出も控えています。ショッピングセンターやテーマパーク、レストランの需要が減少した反面、ソーシャルディスタンス確保のため、ネットショッピングと共に配達、テイクアウトでの食べ物の需要が増えています。そのため、環境のために使い捨て用品の使用を控えましょうという社会的な雰囲気も一気に薄れ、また使い捨て用品を使うようになりました。

ただの繊維廃棄物に見えるマスクも、実はプラスチックです。マスクを含むプラスチックごみは、捨てられた後、マイクロプラスチックに変わり、さらに長い時間が経つとナノサイズに分解されます。すでに、地球のプラスチック問題は限界に達しています。人類が作ったプラスチックの半分は、今から過去 13 年間に生産され、2030 年には海や川に流れ込むプラスチックごみが年間最大 5300 万トンに達すると予測されています。

プラスチックは私たちの生活を豊かにすると同時に、地球に莫大な被害を与えています。マイクロプラスチックは海洋生物だけでなく、私たち人体にも悪影響を及ぼす可能性があります。年間世界中で作られるプラスチックの量は、約 4 億トンで、ビニール袋、ペットボトルは、毎年 5 千億個以上が生産されています。

国際社会はプラスチックごみを気候変化に準じた問題として認識し、対応に力を入れています。プラスチックは人間の生活や国の産業発展と密接に関わっているため、国際社会は問題解決のために世界が協力することが何よりも重要だと考えています。その上、国連環境計画(UNEP)は毎年 6 月 5 日を「世界環境の日」に指定し、2019 年には「プラスチック汚染」がテーマに選ばれました。また、UNEP を中心に世界各国が協力しています。

プラスチックゴミの対策として、日本は、2020 年からコンビニやスーパーのビニール袋を全面的に有料化し、プラスチックの分別基準をより厳しく管理しています。また、様々な企業でもバイオプラスチックなどの環境にやさしい素材やプラスチックの代替品の開発をしています。韓国では、マイクロプラスチックの一種であるマイクロビーズを化粧品、洗剤、研磨剤などに使用できないように政策を改正しました。ヨーロッパ連合でも使い捨てプラスチック禁止政策を施行しており、中国、アメリカ、イギリスなどの国でもマイクロプラスチックの使用を法律で禁じています。

このように国は違っても、地球のために、環境のために皆が頑張っています。国境を越えて、世界の国々が協力し、個人の努力も集まっていけば、私たちが住んでいる、これか

ら生きていく世界はもっと住みやすい社会になると思います。ですから、皆さん、個人レベルで何ができるか常に意識して行動しましょう。少なくとも私は、ゴミを最大限に減らす生活を心掛けます。

ご清聴ありがとうございました。

否定されても乗り越える 信念を貫け

仙台育英学園高等学校 2年 強 蘭茜 (キョウ ランセイ)

「みなさん、こんにちは。去年11月に、中国から日本へ来ました。強蘭茜と申します。よろしくお願いします！」

この自己紹介をした後、みなさんはきっと、この質問をするでしょう。「何で日本に来たの？」って。

私が日本に来るきっかけとなった出来事は『ミュージカル』です。母に連れられて行ったミュージカル『マンマミーア』を見て、小学生ながらに感動しました。「舞台に立って自分を表現する俳優の皆さんはなんてカッコいいんだ！」と。そこから私は夢中になって沢山のミュージカルを見て、日本の『レ・ミゼラブル』に出会いました。その俳優さんたちは、当時日本語も上手でなかった私の心を驚掴みにしました。ミュージカルが終わった後、私の目には自然と涙が溢れていました。そして、「日本に行ってもっと演劇を学び、舞台俳優になりたい！」という夢を持ち始めました。

しかし、両親にその話をすると反対されました。「舞台俳優なんて、メジャーでない職業なんじゃない？お金も稼げないし、きっと辛いよ。」と言われました。私の日本の大学で演劇を学びたいという夢を、両親はとても心配したのです。

ただ両親が心配するのは、中国の教育理念の影響が大きいからだと思います。中国は人口が多いので、各地域の教育資源は均等に配分されていません。そして、競争も激しいです。大学に合格するために、誰もが他の人よりもいい点数を取るために必死に勉強をして、みんなから羨ましいと思われる仕事に就くまで努力しています。中国では、大学に進学するためにひたすら子どもに勉強させて、勉強以外のことをやらせない環境にあります。

いつも中国の教育とその影響を受けていた私は、夢を諦めたくなることもありました。しかし、去年から日本で暮らし始め、学校の面談で私の目指す夢について先生に話したところ、否定されず、演劇に関する大学の資料の調べ方なども教えてもらえました。こうして日中両国の教育を経験した私は、「国がこんなに近いのに全然違うじゃん…」と思いました。

日本は子どもの夢を育てることを大事にしています。みんなは部活動や全国大会など、勉強以外の生活も楽しんでいます。親は子どものやりたいことを応援しているので、どんな進路を決めても構わないという教育理念が日本にはあると感じました。私は日本での生活を通して、日本はなんて寛容的な国なんだろうと思いました。それも日本に惹かれた理由の一つです。

最後に皆さんに質問があります。私たちは何のために勉強するのでしょうか。知識を身につけるためなのか、卒業証書を得るためなのか？いい会社に入るためなのか？答えは人それぞれだと思います。日中両国の教育を経験した私は、どの国でも、子供たちが望む進路を歩める環境になってほしいと思います。

一度きりの人生、望んでないことをするのは、後悔しませんか？私は後悔したくないです。否定されても諦めず、様々な困難を乗り越えて、人々に感動を与える舞台俳優になります！そして、私と同じように、子供達には自分の夢を持ってほしいです。

みなさんも是非やりたいことをやってみましょう！

ご清聴ありがとうございました。

太棒了～私の前途を照らす光～

柏市立柏高等学校 柏木 茉林

「太棒了（たいばんら）」この中国語で書いた言葉は、私の中学時代の担任の先生が、私の日記によく書いてくれた言葉です。「太棒了」の日本語の意味は「とてもよくできました」です。私の担任の先生は、中国語が全く分からないのにもかかわらず、私を励ますために、中国語で、この言葉をたくさん書いてくれました。もう中学を卒業して二年半たちましたが、私はその中学の担任の先生の優しさを忘れられません。

私は2018年4月、中国から来ました。日本語は全く分からず、環境も違う中、公立の中学校に入学しました。日本語が分からないまま塾に通い始め、日本語の勉強をしていました。週5日は塾、2日は家で宿題をやる、勉強ばかりの日々でした。また、私の母は私に厳しかったので、家で私が日本語を話さないと、返事をしてくれない時もありました。私の日本語能力を向上させるためだったと今は分かっているので、感謝の気持ちでいっぱいですが、当時はとても辛いと感じていました。

日本に来る前は、楽しい中学校生活を送れると思っていました。しかし、来日して私が経験したことは、想像とは全く違いました。勉強は難しく授業を聞いても何も分かりませんでした。学校では仲間がいなくて、家では親が厳しいことに苦しんでいました。この暗闇のような生活の中で、私の心を救ったのは優しい先生方との出会いでした。

私の中学では、毎日、学校生活の記録を書き、先生に提出することになっていました。最初は、教科の記録と宿題の欄に板書を写すだけでした。「今日の記録」という欄は、本来なら、提出物や重要な連絡事項を書くところでしたが、当時の私は、そのことを知らなかったので、いつも何も書いてはいませんでした。ある日その欄に、ふと思いついて、「ドラえもん」の絵を描きました。

次の日先生が、絵の下に、「太棒了」を書いてくれたことに気がつきました。それから、毎日、簡単な言葉で日記を書く習慣ができました。「給食の魚がおいしかったこと」、「授業が難しかったこと」、「合唱の練習をして、みんなの歌声が美しかったこと」などを書き続けました。先生も、いつも、たくさんのコメントや誉め言葉などを書いてくださり、私が書き間違えた日本語や漢字を直してくださいました。学校では、あまり話すことがなく、一日の終わりに、自分が発した言葉は指で数えられるくらいでした。その日記は私の本音を誰かに伝える唯一の手段でした。私は、先生のメッセージを毎日楽しみに待つようになりました。

そして、自分の人生の中で、初めての大きな目標ができました。それは、「日本の高校に入学すること」です。同時に、私は再び不安に陥りました。自分が本当に合格できるのか、という思いでした。入学試験に向けて、毎週3本の作文を書き続けました。

また、冬休み中は、「松戸夜間中学」へ行き、先生たちと面接の練習を行いました。入学試験が近づくとつれ、精神的に辛くなりましたが、先生が「茉林ならできるよ！」と言ってくれた姿が浮かんで来て、やる気が湧いてきました。

合格が分かった時、先生が、大きな声で、笑って喜んでくれました。「これから人生長いけれど、困った時も怖がらないで、自信をもって頑張るんだよ。」と言ってくれました。この経験から、「人の勇気を引き出すのは、自分を信じてくれる、他の人の励まし」だと分かりました。高校入学後、困ったことがあった時、私は日記を開いて、先生のコメントを読み返します。先生の言葉を読み、先生の笑顔を思い出すと、心が温かくなります。「太棒了」の言葉を、私の前途を照らすトーチとして、これからも頑張っていきたいと思います。

文化と言葉を繋ぐ

宮崎学園中学・高等学校 イシパルドウンラマ

「ツァンマラ・タシデレ」

これはチベット語で皆さんこんにちはという意味です。私は、ネパール生まれのチベット人です。皆さんはチベットと言ったらどのようなことが思い浮かびますか？ドライ・ラマ、チベット高原、チベット仏教、ヒマラヤ？はい。これらはチベットの特徴です。今から2年前私は日本に留学してとても大切な事に気づきました。それは、自分の母国の言語の大切さです。私は、ネパールにいた時はネパールの学校に通っていて、学校ではチベット語を使う事ができませんでしたので家では、チベット人の尼さんによってチベット語を学びました。しかし、私はその重要さがあまり分かっていませんでした。それより英語かネパール語などを優先して勉強していました。何故ならばネパールの社会ではチベット語よりネパール語や英語がより使われて、優先されます。日本では、みなさん、日本語を使い学校の勉強し、周りの人々もみんな日本語を使っています。このようなことを見ると、日本語はこれからもずっと世代から世代に引き継がれ、この世の中に残っていくと私は思っています。しかし、自分の母国であるチベットの言葉はそうではありません。私たちのようなチベット人にとっては主な問題は、文化、伝統や言葉などの絶滅危機だと思えます。チベット人でもチベットの文化や言葉を知らない若者がだんだん増えていきます。チベットにいる、学校に行けていない子供たちは、チベット語を勉強する事が出来ず、そのまま大人になります。そうして彼らは自分の子供たちにもチベットの文化や言葉を教えられないので次の世代に引き継ぐことはできません。私たちチベットにルーツを持つ人は、母国を離れて、自分以外の国の文化や伝統や言葉に触れることが多いです。それはとても良い経験だと思えます。私がネパールにいた時に、学校の授業は全て英語、友達話すときは、ネパール語、そして家ではチベット語を使っていました。このように多文化の中で育った事で勉強になる事がたくさんありました。自分の生まれ育った文化や習慣、社会の仕組みなどを理解したうえで、他の国との文化的な違いを認め、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくのはとても大切だと思えます。しかし多文化の中で生きながらも、自分の母国語を大切にしていくことはとても重要です。言語を保護していくうえで、一番の役割を果たしているのは家族だと思えます。家族の中で親が子供と母国語で話していたらその子供も自分の母国を覚えるようになります。これはチベット人にとって変えていく必要のある一つの課題だと思えます。

私は古くから引き継がれた文化や誇りを受け継ぎ、チベット社会を残していけるような人になりたいです。日本に来て色々な人に出会う中で自分がとても成長しました。これからももっともっといろんな国の人と交流をして、いろんな価値観を学び、国際社会の中で役立てる人間になりたいです。

違うようで似ている私たち

東京都 工学院大学附属高等学校 2年 鄭 明子

皆さんこんにちは。日本の高校で通っている中国出身の留学生です。私は中国を飛び出し、日本に、先進国の知識と文化を求めてやって来ました。

私は高校入学時から長い間、新型コロナウイルスの影響により、中国の自宅で、オンラインで授業を受けていました。その間、パソコンの画面を通じてしか、学校にいるクラスメイトや先生方と交流ができませんでした。正直、本当に辛い日々でしたが、画面の向こうで皆が私に寄り添ってくれたので、一緒にこれを乗り越えることができました。「山川異域風月同天」、オンライン授業の間、私たちの距離は3047キロでしたが、心の距離はずっとゼロでした。その後11月に無事来日することができ、今日は日本で生活し始めて176日目です。

日本で生活し始めて、多くの貴重な思い出を作ってきました。その中で、初めて見つけた、日本のクラスメイトとの違いに驚いたことがあります。例えば、スマホで連絡をするときの返信が、日本人はとても遅いのです。中国では皆、メッセージを見た瞬間すぐ返信するのですが、日本人からは返信が来るまで、少なくとも15分は待たなければなりません。最初は、そういう人はスマホに慣れていないのかなと思ったのですが、他のクラスメイトも同じだということに気づきました。気になってインターネットで検索したら、なるほど、暇だと思われたくないし、相手のメッセージをよく考えてから丁寧に返事をしたいから、ということのようです。これは、日本と中国の、ソーシャルモードの違いだと思いました。

そんな中で、もう一つ新しい表現を学びました。「重い」という表現です。先日友達が、「彼氏が毎日電話したいっていうんだよね。ちょっと重いなあ」と言っていたのを聞き、「それは自慢話では？」と最初は思いました。もし私に彼氏がいたら、絶対1日28時間でも、電話をかけてほしいと思うからです。この考えをその日本人の友達に言ったら、お互いにカルチャーショックを受けました。でも私が、理想とする関係を「重い」と感じるのは、「好きではない」のではなく、「一人の時間も大切にしたい」、「相手との距離がある程度ほしい」という気持ちがあるということで、納得をしました。これも、日本と中国の、感情の表現形式の違いだと思いました。

学校での生活はもちろん楽しいです。いきなり背中から抱きついたり、授業中にこっそり机の下でおやつをシェアしたり、恋バナしたり、お互いに秘密を打ち明け合ったりしました。また、私にもっと深く日本の高校生文化を感じさせるため、色々な「JK語」を教えてくださいました。「草」「ぴえん」「それな」だけではなく、今はもうなかなか使わないような「ヤバスティックパイナポー」なども教わりました。そうした日々を通じ、コミュ

ニケーションの形態は異なっても、その違いを理解し、共通の楽しみを見つけ、また相互理解のための学び合いをすることが大事だと、学びました。

留学生である私は母国と日本の違いと良さを日々感じながら、生きることができます。私たちは異なる言語を話し、異なる教育を受けていても、「愛情をもって育てられること」、「遊び心があること」、「大切なものに命を懸けること」などは、おそらく一緒です。私たちは本質的には同じです。皆、同じ「人間」なのだと思います。これこそが、私が日本に来て一番実感できたことなのです。

日本の皆さんと共に過ごした時間と、皆さんから頂いたひとつひとつの善意は、すべて私の人生の中に散らばっている点状の星となり、一つの完全体な私を作り上げ、日中友好関係を促進する架け橋になります。私は日本も中国も、大好きです。

第 10 回

国際理解・国際協力に関する
生徒研究発表会

2021 高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会に関する細則

1 目的

高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告または研究発表とする。各活動の振り返り・まとめの場とするとともに、多くの人に活動を知ってもらい、国際理解・国際協力・国際ボランティアの連携・発展・活性化をめざす。

2 発表内容・資格等

(1) 内容

高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等に関する内容で、日本語による活動報告または研究発表とする。視聴覚機器等を使用して8分以内で発表した後、発表内容に関する5分程度の質疑応答がある。発表生徒は1~6名程度とする。個人の研究発表も可能とする。

(2) 参加資格

各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校ならびに中等教育学校の生徒

(3) 発表時間：

1) 8分以内であること。ただし、時間を超過した場合には減点の対象とする。

3 審査基準

(1) 事前に審査するため、大会プログラムに以下の項目を発表の要旨として明記する。

<タイトル(テーマ)・学校名・発表者生徒氏名 >

1 発表を通じて伝えたいこと

2 実施日・期間

3 主な実施場所

4 取り組みへの参加者及び人数

5 課題発見・動機など

6 目標・ねらい

7 具体的な取り組み内容・工夫・配慮し点(実施日・期間・主な実施場所など)

8 成果

9 今後の展開・展望

(2) 審査基準と配点

発表の内容 70点	1 国際教育の目的やテーマにあった内容構成か (動機・問題発見)	10	70
	2 持続可能性がある取り組みか (継続活動の場合は継続性/単年活動の場合は今後の継続が見込めるか)	10	
	3 計画的に研究が進められているか (研究のプロセス)	10	
	4 生徒自身が主体性または独創性を持って、活動を行っているか (生徒自身の問題意識、創意・工夫はあるか)	10	
	5 成果は理論的・客観的に検討されているか (まとめ+今後の課題)	10	
	6 研究活動は、生徒自身の国際的な視野を広げるために役立つものであったか <国際的視野・Think Globally>	10	
	7 この取り組みはその地域・学校ならではの活動であるか <地域性・Act Locally> (Q6 & 7: 国の内外を問わず、現状でできうる活動の模索、実践)	10	
発表のしかた 30点	1 発表にかかわる準備と機器等の活用が適切であったか	10	30
	2 発表のしかた(声の大きさと話し方)や態度が適切で工夫されていたか	10	
	3 質疑に対して適切な応答ができたか	10	

*審査は、「SABCDの評価」とする。S→10点 A→8点 B→6点(基準点) C→4点 D→2点とする。各審査員に○をつけてもらう形にし、エクセルに入力、審査員が画面で確認し、点数が上位のものから表彰を決める。

(3) 発表時間の減点

- 1) 8分以内であること。ただし、時間を超過した場合には減点の対象とする。
- 2) 計時・時間の表示
 - ①計時は、生徒の第1声から開始する。計時は、正確さを期すために、3つ以上の機器で計時する。
 - ② 7分、7分30秒、8分の時点で時間を示す。
- 3) 減点は、以下のとおりとし、8分以内は減点しない。
 - ①後20秒(8分20秒未満)は減点しない。
 - ②後20秒以上40秒未満は、各審査員の点数から1点減点する。
 - ③後40秒以上60秒未満は、各審査員の点数から2点減点する。
 - ④後60秒以上は、各審査員の点数から3点減点とする。
 - ⑤10分を超えても続ける場合は、ベルを連呼して発表を中止してもらう。
- 4) 発表者は、各自の責任において、計測機器を使用しても構わない。

4 審査員および表彰

(1) 審査員(5～7名)

- 1) 研究発表会審査員は以下のメンバー(5～7名)を基準とする。
 - ①国際協力機構 ②国際交流基金 ③日本国際協力センター
 - ④国際教育研究協議会全国理事等(管理職を含む2～3名) ⑤大会実行委員(1名)
- 2) 国際教育研究協議会全国理事等の管理職審査員の中から「審査員長」を選出する。現在は国際研から審査員長を選出する。
- 3) 審査委員会に、「国際教育研究協議会全国理事または大会実行委員」が入り、審査会の進行を行う。
- 4) 審査については、事前に「審査員打ち合わせ」を行う。
- 5) 3校発表後に、「審査すりあわせ」を行う。

(2) 表彰(賞の名称は未定)

- 1 「国際協力機構国内機関長賞」
- 2 「国際交流基金賞」
- 3 「日本国際協力センター賞」
- 3 「全国国際教育研究協議会賞」
- 4 「国際理解・国際協力奨励賞」

5 全国大会出場の出場選出方法について

発表数は「開催県1」「開催ブロック1」「公募4」の6校を標準とし、5～7校を目安とする。「四国地区」は地区大会を開催しているので、順位を考慮する。選出は大会実行委員会が決定する。なお、参加生徒交通費の支出については、大会実行委員会が決定する。

発表校の裾野拡大のために当面は同一校による同じ研究テーマでの2年連続の出場はできない。

6 大会結果

大会結果については、大会直後、HP等で報告する。また、全国事務局から各県会長及び事務局長に連絡する。

高校生国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会 発表者一覧

発表者	都道府県	学校名	演題
石野 智子 小野愛玲菜 阪田 真央 阪田 愛実 塚越 陸 藤原 梨佳 宮崎 夢香 柳 創太	兵庫県	兵庫県立 小野高等学校	そろばんから発信！ ～そろばんを通じて豊かな暮らしを提案～
越野 蒼梨 三嶋 渚 出口 輝	石川県	石川県立 金沢商業高等学校	「シンガポールとのオンライン交流で 学んだこと」
鶴園 瑠真 天神 和樹 永山 哲也 橋口 勇斗 中嶋 友哉	宮崎県	宮崎県立 宮崎農業高等学校	「世界にひろがれ！味噌のチカラ!! ～オンラインを活用した発酵食の普及を 目指して～」
安藤 実里 柏井 知颯 木村 拓翔 谷口美七海 橋本 蒼汰	神奈川県	神奈川県立 麻生高等学校	Let's Take Action (海洋汚染問題について)
井上 新菜 木谷 琴音 竹川希緒里 西村 華 原田 香都 海田千奈津	長崎県	純心女子高等学校	シリア難民問題に関する研究発表 (English Speaking Session シリア難民問題研究ユニット)
西口 旺成	福井県	福井県立 福井商業高等学校	Diversity & Discrimination ～全ての人が笑顔で暮らせる世界を 目指して～

発表1

タイトル そろばんから発信！ ～そろばんを通じて豊かな暮らしを提案～

学校名 兵庫県立小野高等学校

発表生徒氏名

石野 智子 小野 愛玲菜 阪田 真央 阪田 愛実 塚越 陸 藤原 梨佳
宮崎 夢香 柳 創太

1 発表を通じて伝えたいこと

“そろばん”をきっかけとして国を超えた人々が繋がり、小野市の「まちの魅力を発信！」するとともに、人々が少しでも平和で楽しく豊かに暮らしていける社会づくりを提案したい。

2 動機・課題発見

私たちが通う小野高校がある小野市は伝統工芸品に“そろばん”がある。「そろばんのまち」として、国内の生産量の約70%を占め、市も伝統産業およびその文化の継承に力を注いでいるが、時代の流れに押されここ小野市においてすら子供たちのそろばん離れは顕著であり、「なぜ今そろばん？」と思われる人がほとんどである。さらに、生産職人も後継者不足でそろばん産業の存続自体が風前の灯状態となってしまう。

しかし、かつては「読み・書き・そろばん」といわれたそろばんの学習については、文部科学省が学習指導要領において小学校3・4年生の算数の必修内容として今なお位置付けており、その重要性を説く人々も多い。

そこで、私たちが所属する「国際経済科」という学科の特性を活かし、このそろばんをツールとして地域貢献と国際交流にスポットをあて、そろばん文化の再燃と町おこしへ向けた活動を展開しようと考えた。

3 目標・ねらい

知育教育の手段として、そろばんの総合的な教育効果や脳トレーニング効果への注目が、世界的に高まりつつある。この状況を踏まえて、そろばんをただの計算道具としてみた時代遅れとする悪いイメージを払拭し、知育教育や脳トレーニング効果にスポットをあてた良いイメージの浸透を図る。このそろばんの付加価値を高める活動を展開することによって、そろばんをまちのシンボルとした“まちの魅力を発信”し、「そろばんのまちONNO」を日本中にまた世界に知らしめる小野市の地域ブランディングに挑戦する。

あわせて、時代にあった魅力やおもしろみのあるそろばん活動を通して人々の資質や能力の向上につなげることにより、老若男女および国を問わず多くの人々が、少しでも健康で豊かに暮らせる社会作りに貢献する。

4 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

まずは、海外でのそろばん人気を逆輸入しながら、知育教育や能力開発に効果のあるそろばんの魅力を再開発する。また、そろばんキャラクターを開発・発信することにより“楽しい・おもしろいそろばん”のイメージを人々にすり込むなど、さまざまな方向から地域ブランディングの立ち上げに挑戦し、地域・社会貢献にも関わる活動を行う。

・具体的な取り組み内容

- ①平成27年に地域でのそろばんの学習に対する興味・関心・効果などの調査を行った。
対象（小野市内全8校の小学6年生・小野市内デイサービスセンターに通う高齢者）
- ②平成27年8月2日に大阪国際会議場で行われた日本と台湾の子供たちとの親善大会を視察し、地元小野市で国際交流大会を開くための準備に取り掛かった。
- ③平成28年10月10日に本校パソコンルームにおいて、地域のそろばん塾に通う小学生約30人とトンガ王国の小学生によるオンライン交流会を企画したが、通信事情の障害から企画内容の実現には至らなかった。
- ④平成29年1月27日に小野市教育委員会が小学校でのそろばん学習の成果確認の場として小学3年生を対象に行うそろばん交流大会（場所：伝統産業会館）で、海外のそろばん学習の様子を紹介し、継続したそろばん学習へのきっかけ作りを行った。
- ⑤平成29年8月6日に神奈川県川崎商工会議所KCCIホールで7か国の子供たちが参加して行われたWORLD ANZAN CLASSICに、運営の補助スタッフとして参加し、地元小野市で国際交流大会を実施するためのノウハウを学んだ。
- ⑥平成30年8月21日に小野市伝統産業会館に於いて、海外からの参加者25名を含めた児童生徒約80人による「そろばん国際交流会 in 小野」を開催した。この運営については、クラウドファンディングを用いて活動資金を捻出し、自分たちの手でそろばん国際交流会の実施に向けた活動を展開し、実現した。
- ⑦令和元年8月21日に東京武道館で、海外の子供たち46人を含む約700人で開催された世界そろばんフェスティバルに運営スタッフとして参加し、そろばんを通じた国際親善活動に携わった。
- ⑧令和2年11月13日に小野市立大部小学校において、同小学校5年生58人とパラオ共和国のミューズ小学校6・7年生35人によるオンラインそろばん交流会を企画開催し、英語によるそろばん国際交流を実施した。
- ⑨現在、ご当地シンボルキャラクターとしてそろばんのキャラクターを開発し、世に広める活動を行っている。

・工夫・配慮した点

地域や国を超えた国際交流の場を高校生が作り出すことにより、単なる地場産業の復興だけを目的とするのではなく、未来ある子供たちが国際交流の体験を通して異文化への興味と関心を持ち、更なる自己の能力育成や知的探求心の養成に向けたきっかけ作りを行うことに重点を置いた。

5 成果

数々の国際的な異文化交流の活動およびその情報発信を通して、「古臭い、今の時代に無意味」といった地元地域の古い価値観を打ち破り、まちのシンボルとしての存在意義を作り出しつつある。また、高校生が企画した様々な活動に参加した子供たちの学習意欲の向上や異文化理解、国際理解につながっている。

6 今後の展開、展望

そろばんキャラクターによる新しいそろばんのイメージ普及活動を通じて、人々がそろばんに親しみながら自己の能力を開花させ異文化を受け入れるきっかけになるとともに、地域ブランディングのきっかけとしてそろばんと小野市の魅力発信を行う。

(4 具体的な取り組み内容の補足資料)

⑥「そろばん国際交流会 in 小野」の様子

神戸新聞(2018年8月22日)



クラウドファンディングで
資金集め



交流会終了後の記念撮影



⑧オンラインそろばん交流会の様子

毎日新聞(2020年11月7日)

海越えてそろばん交流

小野高校生が発案

「福州そろばん」で知られる小野市の市立大部小学校の児童らが発案した。うちろくは3月、NPOが13日、そろばん教育に取り組み巴拉オの小学生とオンラインで交流する。県立小野高校の生徒が「そろばん国際交流会」として発案。そろばん文化の継承と国際化を図る。

同高国際経済科「そろばんから発信班」の3年生10人が企画した。うちろくは3月、NPO法人・国際珠算普及基金主催の交流事業で、巴拉オの子供たちと、7年生35人が参加する。交流会は大部小の5年生58人と、7年生35人が参加する。画面を通してそろばんの魅力を伝えたり、両校児童が英語での読み上げ算に挑戦したりする。

同高生らは、交流会に備え、準備に余念が無い。5日には、スクリーンを使い、小野についてのプレゼンテーションの練習に取り組んだ。

同班リーダーの下原咲彩さん(18)は「そろばんの魅力を海外に発信し、今回の交流会を成功させることで来年以降、定期的に交流が続けられればうれしい」。また、中戸響海さん(18)は「そろばんの楽しさを紹介し、みんなの思い出に残るような交流会にしたい」と意気込んでいる。

【関谷徳】

そろばん国際交流会を企画した県立小野高校国際経済科の生徒
—小野市の同校で

13日・オンラインで 大部小、パラオの児童



大部小学校でのオンライン交流会の様子



小野高校生が送ったそろばんを手に送られてきたお礼の記念写真

発表 2

タイトル 「シンガポールとのオンライン交流で学んだこと」

学校名 石川県立金沢商業高等学校

発表生徒氏名 越野 蒼梨 (こしの あおり)
三嶋 渚 (みしま なぎさ)
出口 輝 (でぐち ひかる)

1 発表を通して伝えたいこと

対面での交流ができない中、オンラインで海外の生徒達と友情を深め、お互いに他国の文化、歴史や学校生活などの違いを知ることやそれらを英語で発信することによって自分たちの価値観や世界観が大きく変わった。コロナ禍でもできることがあり、それをコロナが終わった世界につなげることができる。

2 動機・課題発見

本校では 2015 年からシンガポールにあるテマセクポリテクニク校と交流事業を行っており、お互いの生徒達が年に 1 度お互いの学校を訪問していた。昨年度からコロナ感染拡大のため学校を訪問することができなくなり、交流を途絶えさせないための方策としてオンライン交流を行う事となった。

私たちにとってオンラインミーティングは初めての生徒ばかりで、その上英語で行うミーティングも行ったことがなかった。そのためオンラインでの英語の発信力や、これまでシンガポール研修で行ってきたプレゼンテーションを続けて行えるかが課題であった。



(2019 年 10 月 シンガポール研修時の様子)

3 目標・ねらい

1. シンガポール・日本間での異文化理解と英語コミュニケーション力の涵養
2. 本校で取り組んでいる「金沢ツアー」「商品開発」等のプレゼンテーション

4 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点

(取り組み内容)

- ・本校生徒 18 名、テマセク生 23 名が参加した。それぞれ 4 グループに分け、9 月～12 月 2

週間に1度のペースで、計8回それぞれのグループ毎にオンライン交流を行った。

- ・6月～8月・・・6月の休校明けより事前研修として英語練習を行った。また8月4日には北國銀行海外戦略課の方々による、シンガポールについての講義が本校で行われた。
- ・9月・・・オンライン交流が始まる。(自己紹介や学校紹介)9月30日にシンガポール日本大使館北アジアディレクターのマーカス・タン氏による講義が実施され、日本で働いた経験からシンガポールと日本の働き方の違いについての話を聞く。
- ・10月・・・オンライン交流を通し、お互いの宗教、人種、地理、ポップカルチャーの違いについて話をする。
- ・11月・・・オンライン交流を通し、ステレオタイプとカルチャーショックについて話をする。
- ・12月・・・12月18日にはシンガポール日本大使館の古郡徹氏による講義が行なわれ、在シンガポール日本大使館「ジャパンクリエイティブセンター」の活動についての話を聞く。オンライン交流最終日(12月23日)には、お互いにどのようなことを学んだかを振り返り、お互いの動画発表を通し、「観光ツアー」や「商品開発」などを共有し楽しい時間を過ごした。



(実際のオンライン交流)



(事前研修 北國銀行海外戦略課
の方々からの講義)

(工夫・配慮した点)

- ・毎回の交流のテーマについては事前にテマセク校と本校の先生方で計画を立ててもらい、その後生徒達はそのテーマに沿って話す内容を考え、それを英語でどのように表現すればよいのかを練習して交流に臨めるようにした。
- ・毎回の交流では、話がしやすい雰囲気を作るため“**What's new?**”で始めるようにし、その後本題のテーマに移るようにした。
- ・それぞれのグループにリーダーを作り、**LINE**等を使用しリーダーが相手のグループリーダーと事前に打ち合わせができるようにした。
- ・生徒達だけの交流に終始することなく、在シンガポール日本大使館等で働いている方からの講義もオンラインで行った。最終日にはお互いの先生方も入り全体で振り返りを行うようにした。
- ・事前・事後指導として外部(北國銀行海外戦略課)の方々を招きシンガポールの概況の講義を聞き、成果物(商品開発)を見て頂いた。

5 成果

オンライン交流でお互いにつながりを持ち、本校の生徒達はそれまで知らなかったシンガポールの文化を画面越しではあったが感じる事ができ、テマセク生たちも同様にそれまで持っていた日本文化のイメージが変化したようだ。

英語コミュニケーション力に関しては事前に勉強した事が生かせなかった場面も多々見られた

が、電子辞書、携帯の画像等を利用し、テマセク生の温かい言葉に支えられてどうにか会話を成立させ、交流終了後においても ALT と会話をしたり英語の資格試験に挑戦したりしている。

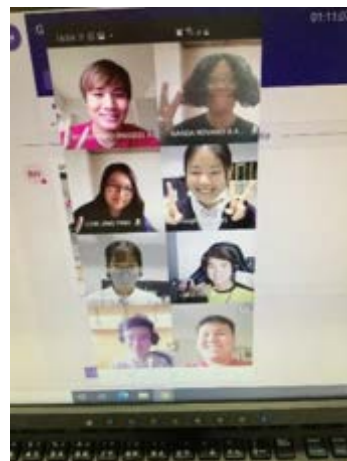
また「観光ツアーの提案」や本校が開発した「海外向けジェラート」等を紹介した動画作成の技術を学ぶことができた。シンガポールの生徒達も同様に動画を紹介し、本校の生徒達も、テマセク生達もお互いの国を行き来できる日が来ることを心待ちにしている。

6 今後の展開、展望

今年度もシンガポールへの渡航が難しく、9月8日から11月までオンラインでの交流をする事となり、新しい参加者が夏休みを利用し事前研修を行っている。英語での交流に少しでも自信がつくように日本の文化や伝統、ステレオタイプ、などについて英語で話せるように練習し、オンラインに特化した会話の切り上げ方やグループ内の他の人に意見を求める言い方などを含めたスピーキング力を上げるため、リモートで数回の実践練習を行うことにしている。

昨年に引き続きお互いにたくさん学びながら、今回はこちらからも観光などのプレゼンだけでなく、テマセク校の生徒達に本校での学校生活やイベント、また日本語を知ってもらうなど昨年度よりも多くの発信が英語でできるようにしたいと考えている。

このコロナの状況が落ち着き、以前のようにお互いに行き来できるようになったら実際にオンライン交流をしていた生徒達に会い、一緒に行動することによってさらに友情を深められるようになればと思っている。



(北國銀行でのジェラートのテストマーケティング)

(オンライン交流時の画面)

発表 3

タイトル

「世界にひろがれ！味噌のチカラ!!～オンラインを活用した発酵食の普及を目指して～」

学校名 宮崎県立宮崎農業高等学校

発表生徒氏名 鶴園瑠真、天神和樹、永山哲也、橋口勇斗、中嶋友哉

【発表概要】

1 発表を通して伝えたいこと

- ①日本の味噌消費量が減少している。
- ②味噌の魅力を多くの人に伝えることで、食文化を守っていききたい。
- ③コロナ禍でもオンラインで世界とつながることができる。
- ④日本の発酵食が世界から注目されている。
- ⑤食文化を守ることが、SDGs の目標達成や私たちの幸せな未来とつながる。

2 動機・課題発見

私たちは、1年次に地域の様々な食農イベントに参加して、「鯉節の削り方」と「本校の味噌を使った簡単味噌汁を作る活動」を継続するうちに、「おいしくて、人を笑顔にしてくれる味噌の魅力」をたくさんの人に伝えたいと思うようになった。そこで、味噌の作り方を学ぶことから始めた。本校食品工学科の先生や、宮崎市青島にある長友味噌醤油醸造元で研修を行い、材料から製造方法までを学んだ。

この活動で「今の小学生は家庭で味噌汁を食べる機会が減っている」という話を聞き、実際に調べてみると、味噌の一世帯当たり年間購入量が1977年の約13kgから2020年の5.3kgまで、およそ半分以上に減っていることが分かった。そこで、この現状を踏まえ、地域や国内外とのオンライン交流を通して、多くの方に伝統食である味噌と発酵食の良さについてひろげる活動を行ってきた。

3 目標・ねらい

活動当初の目標は、鯉節削り体験と宮崎農業高校の味噌を使って味噌汁を自分たちで作ってもらうことで、味噌文化の良さをひろげることだった。しかし、新型コロナウイルスの影響でイベントが実施できなくなり、対面での交流が難しい状況となった。そこで、オンラインを活用した講座や交流を企画立案し、国内外へ日本の味噌と味噌を使った料理、発酵食を紹介することで、日本の食文化を守ることを目標にしている。



4 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

(1) 実施日・期間 令和元年5月～令和3年4月

【研修】

- ①校内味噌作り 宮崎農業高校食品工学科 清原 保先生 令和2年 5月29日(金)
- ②校外味噌作り 長友味噌醤油醸造元 長友 陽子様 令和2年 6月27日(土)
- ③オンライン こゆ財団教育イノベーション推進専門官 中山 隆様 令和2年 8月28日(金)
- ④SDGs MIYAZAKI ACTION パームス企画×宮崎大学×宮崎農業高校 令和3年 3月20日(土)
- ⑤校内発酵食作り 長友味噌醤油醸造元 長友 陽子様 令和3年 3月22日(土)

【地域活動】

- ⑥生目古墳祭りなど「味噌汁を作る活動」計5回 令和元年10月 5月～令和2年 2月23日(土)

【主催事業】

- ⑦「食でつながわくわく交流～味噌をテーマにした体験～」 令和2年 7月18日(土)
- ⑧「農業高校生とオンライン体験～味噌と宮崎の郷土料理冷や汁を作ろう～」
令和2年 9月12日(土)
- ⑨「日韓オンライン交流～日本と韓国の発酵食を学ぼう～」 令和3年 4月18日(日)
- ⑩「高校生と一緒にオンライン体験講座～日本食と発酵食について楽しく学ぼう～」
令和3年 7月10日(土)

(2) 主な実施場所

本校会議室他、オンライン交流は「ZOOM」を使用

(3) 取り組みへの参加者及び人数【主催事業】

- ①「食でつながわくわく交流～味噌をテーマにした体験～」 参加者 9名、部員 23名
- ②「農業高校生とオンライン体験～味噌と宮崎の郷土料理冷や汁を作ろう～」
参加者 12名、部員 16名
- ③「日韓オンライン交流～日本と韓国の発酵食を学ぼう～」 参加者 28名、部員 14名
- ④「高校生と一緒にオンライン体験講座～日本食と発酵食について楽しく学ぼう～」
参加者 25名、部員 25名

(4) 内容及び工夫・配慮した点

私たちは、農業高校の授業で学んだ知識や技術を生かして、活動や交流に取り組んできた。

①「食でつながわくわく交流～味噌をテーマにした体験～」

地元の赤江地域まちづくり推進委員の皆さんと交流した。ここでは、味噌や味噌ボールを作った。味噌ボールは、冷蔵庫などで長期保存が出来、味噌を手軽に食べてもらえると大変好評だった。また、宮崎の郷土料理「冷や汁」を作り、参加した大人の皆さんから各家庭の味についての話を聞くことが出来た。

実際の交流では、参加者へコロナ対策として事前の検温と体調管理、マスク着用やアルコールでの手指消毒徹底をお願いした。また、密にならないように交流を行った。味噌作りの際には今まで勉強したことを生かして、本校で生産した大豆を蒸してペースト状にするなど、時間短縮できるように工夫して材料を用意した。



②「農業高校生とオンライン体験～味噌と宮崎の郷土料理冷や汁を作ろう～」

コロナ禍で、どうすればもっと多くの方と交流できるのかを話し合った結果、東京や宮崎の家族を対象に、オンラインで体験講座を開催することにした。交流では、“最初の出会い”を大切にするため、緊張をほぐすアイスブレイクを行った。講座では、「味噌キット」を使用した味噌作りと、本校の味噌を使い「冷や汁」を作った。宮崎の郷土料理をひろげることにもつながった。

今回、初めて「Zoom」を使うため、こゆ財団の中山さんから時間配分や説明の仕方に工夫が必要ということを教えていただいた。また、長友味噌醸造元の長友さんには、味噌の国内外における消費動向や食文化などについてくわしく教えていただいた。リハーサルでは参加してくれた本校の生徒より、「料理の説明の仕方が言葉だけじゃ伝わりにくい」などアドバイスもらった。また、私たちも話し合い、「身振り手振りを大きくしたり、相槌をうったりして相手に伝わるようにする」などの改善を図った。本番では、料理の説明はスライドも使い、笑顔で大きな声でしゃべることを意識した。



③「日韓オンライン交流～日本と韓国の発酵食を学ぼう～」

海外の発酵食に興味を持った私たちは、日本語を学んでいる韓国のラオン高校と、宮崎県内の普通科高校3校に呼びかけ、オンラインでの交流を行った。日本からは、味噌の作り方を実物やスライドを使って日本語で伝えた。冷や汁は、約5分で作れるので、実際にキュウリを切り、鰹節を削る所を見せながら作り方を紹介した。韓国からは、キムチの作り方、たくあんの漬け方・料理・日本と韓国のたくあんの違いを紹介してもらった。また、交流会ではお互いに疑問に思ったことへの意見交換を行い、他国の文化について学ぶことができた。

工夫・配慮した点は、文字を韓国語にして相手に分かりやすいようにまとめたところである。また、韓国の先生が通訳しているのでも、理解できるようにゆっくりと進行することを心掛けた。



④「高校生と一緒にオンライン体験講座～日本食と発酵食について楽しく学ぼう～」

日本の食文化を海外にも発信したいと考えたが、言葉の違いが不安だった。そこで、日本人学校の先生へ参加者募集を依頼し、インドとカンボジアに住む日本人小学生と交流した。どちらの国も、コロナの影響で外出できない状況だった。当日は、日本との時差を考えて、相手国の時間に合わせて行った。内容は、発酵食の紹介やクイズ、参加者の国の発酵食についてお互いに紹介し、その後、日本食の説明とおにぎり・味噌汁作りを行った。

工夫・配慮した点は、各家庭での料理の進み具合を考慮しながら、名前を呼びコミュニケーションを上手く取りながら進めたところである。また、事前に参加者に地域の発酵食について教えていただき、私たちもその発酵食について勉強して交流の場に臨んだ。



5 成果

初めてのオンライン講座では、参加した小学生から「はじめて‘冷や汁’を食べて、作り方を知ることができた」「おいしかった」との感想をもらい、私たちが目指した「小学生に味噌を伝える」という目標は達成することができた。さらに、この事業は地元新聞にも取り上げられ、多くの人に知ってもらえることができたので、活動に対する自信にも繋がった。

日韓オンライン交流では、県内の高校生と共に、韓国の食文化について学ぶことで、改めて日本の食文化の良さを見つめ直す機会となった。

海外の小学生と行ったオンライン体験講座では、「来週もやりたい」「自分で作った時よりおいしくできた」と嬉しい感想を聞かせてもらい、とてもやりがいを感じた。今回、日本の食文化を伝えながら、海外の食文化についても学ぶことができる絶好の交流会になった。

6 今後の展開や展望

今後は、さらに交流の輪をひろげていこうと考えている。コロナ禍で発酵食は見直されているので、日本の味噌や食文化をひろげるには良いタイミングである。また、海外の食文化についても学ぶことができる絶好のチャンスである。オンライン体験講座に参加できなかった方には、動画で楽しく学んでいただこうと計画している。

昨年度より SDGs の「2 飢餓をゼロに」「3 全ての人に健康と福祉を」にも焦点を当てながら活動しているが、目標達成のためにはさらに活動を拡大させる必要がある。幸せな未来を築くためにも、農業高校生である私たちが食と農の分野から出来ることを追求していきたい。

発表4

タイトル (テーマ) **Let's Take Action** (海洋汚染問題について)

学校名 神奈川県立麻生高等学校

発表生徒氏名 安藤実里、柏井知颯、木村拓翔、谷口美七海、橋本蒼汰 (5名)

1 発表を通して伝えたいこと

私たちは現在、地球上の多くの環境問題に直面している。この美しい地球を未来に残していくために、私たち高校生に何ができるであろうか。より知識を深め、環境問題を身近に感じるためにも、考えているだけではなく、実際に行動に移すことの大切を伝えたい。

2 動機・課題発見

現在、プラスチック製ストローの問題がメディアで取り上げられており、大手コーヒーショップ等ではプラスチック製のストローを紙製にするなどの対応を行っている。そうした報道を聞く中で、亀の鼻の中にストローが入っている画像を目にし、心が痛んだ。また、ストロー以外にも、死んだ魚の体内からビニール袋が見つかるなど、プラスチック製品による海洋汚染の問題が深刻なのだとすることに気づいた。私たちは多くのプラスチック製品を日々使用しているが、中でも、飲み物の容器として使用し廃棄しているペットボトルやプラスチックカップの問題が大きいのではないかと考えた。

3 目標・ねらい

私たちが使うことの多い飲み物の容器であるペットボトルやプラスチックカップについて、何か代替のものが作れるのではないかと考えた。プラスチックのように安価で、また衛生的で使いやすいものはどんなものがあるか。インターネットで調べ、実際に自分たちで作ることで、私達自身がプラスチックごみの削減に直接関わることのできるきっかけとしたい。

4 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

(実施日・期間、主な実施場所、取り組みへの参加者及び人数などもわかるように記載してください)

・実施日・期間：令和2年8月15日～10月30日

・主な実施場所：学校内の教室（オーラル教室、化学実験室）、インスタグラム（アンケート実施媒体）

・取り組みへの参加者および人数：5人（今回の発表者）

・取り組み内容

ペットボトルの代わりに「Ooho! (オウホウ)」、またプラスチックカップの代わりに「ゼラチンコップ」が適していると考え、自分たちで実際に作ってみることにした。

①「Ooho!」は「持ち運べる水」として、ロンドンのマラソン大会でも試験的に運用された実績がある。食品添加物であるアルギン酸ナトリウムと乳酸カルシウムを用いて水に膜を作り、ボール状にする。すなわちOohoは「ゼリー状の水」なので、全てを口にすることができるので、ゴミが全く出ない究極のエコボトルとなる。インターネットで調べた手順に従って作成した。

②ゼラチンコップは、ゼリーを作る時に使用するゼラチンを用いて作るコップである。ゼラチンはスーパーで安価で購入することのできる身近なもので、口にしても安全であり水にも溶ける。これについてもインターネットで調べた手順に従って作成した。

5 成果

①「Ooho!」について

何度か作成してみたが、本来は丸い形になるはずが分量の関係でうまくきれいな形および硬さならず、作成者である私達自身でさえも口にする気にはなれなかった。また、口に入れるものがそのまま表面に出ているため、今回はコロナ禍ということもあり試飲することを控えた。また、コロナが収束しても、外側に菌などが付着する可能性があり、一般的に実用化することは難しいと感じた。

②ゼラチンコップは短時間で簡単にコップとして使えるものを作ることができた。2、3日放置して乾燥させるとかなり硬いものができる、実用化の可能性を感じた。見た目もうまくできたので、インスタグラムで高校のクラスメイトにアンケートを行い、実際に使ってみたいかどうかを尋ねてみた。見た目は本当のコップのように綺麗にできたが、アンケート結果では「使う気にはならない」という意見が多かった。考えられる理由として、今まで使用していないものへの抵抗感や信頼性のなさがあるかと考えられる。

6 今後の展開、展望

プラスチック製品の削減において、「使わない」という選択がある。しかし、日々の生活ではプラスチック製品に多く頼っていることもあり、「使わない」ということは難しい。そう考えるとプラスチック製品の削減は実際には難しいと感じていたが、その代替品を用いることで、プラスチック製品使用の削減に私たち自身が貢献できる可能性を感じた。しかも、今回はスーパーで売っているような身近なもの（今回はゼラチン）がプラスチック製品の代わりになるという発見があり、環境問題を身近に感じることもできた。

今後は、私たちがこの研究で感じたように、周りの友人たちを含めた高校生にも興味を持てるような形で、SNSを活用して環境問題に関する知識を広め、プラスチックごみの削減を含めた環境問題についての活動していきたい。

発表5

タイトル シリア難民問題に関する研究発表
(English Speaking Session シリア難民問題研究ユニット)

学校名 純心女子高等学校

発表生徒名 井上新菜、木谷琴音、竹川希緒里、西村華、原田香都、海田千奈津

- 1 発表を通して伝えたいこと・・・次世代を担う高校生が広く世界を知り、私たちはみな同じ船に乗っているかけがえのない存在であるべき（ローマ教皇フランシスの言葉）ことを認識したうえで、自分たちがやれることに挑戦することの重要性を伝えたい。
- 2 動機・課題発見・・・長崎市からの委託を受けている（公財）長崎平和推進協会が実施している青少年ピースフォーラム。このフォーラムでは、全国の平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深めている。本校生のなかに、高校Ⅰ年次よりこのフォーラムに参加し活発に活動していた生徒がおり、Ⅱ年次でもよりいっそう中心的な役割を担いたいと考えていた。が、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、被爆75年を軸に企画されていたほぼすべての平和ボランティアの取り組みは、実施できないことになってしまった。そこで、当該生徒が所属していた純心女子高等学校英語コースの有志が、グローバルイシューに造詣が深いネイティブ教員の指導を仰ぎつつ、小さな学びのセッションを始めた。これが発端である。学びを進めていくうちに、一見、地球の裏側の、自分たちとはまるで無関係に思われた難民問題が、私たち自身やその社会と密接に関連を持っていることが、セッションメンバーたちには深く理解されるようになった。メンバーたちは調査・研究と同時に、活発に話し合いを繰り返した。そのような学びの深まりのなかでメンバーたちが見出したのが「シリア難民問題」であった。
- 3 目標・ねらい・・・私たちは誰しも平和な世界を望んでいる。しかし、平和な世界を構築するためには、人々にとって平和とは何か、あるいは平穏な生活を営めない人々の現状とはどのようなものかを「正確に理解する」必要がある。私たちは第1の目標をこれに定めた。そのためにネイティブ教員のレクチャーを受け、意欲的に調査・研究に勤しみ、議論を積み重ねた。ついで第2の目標を設定する際、セッションメンバーたちは、自分たちに何かできることがないかと考え始めた。その過程で、UNHCR日本のホームページにあるJ-FUNユースの活動を知った。J-FUNユースでは、大学生や高校生たちが自分たちにできることを考え、行動している。これらの活動を参考に、セッションメンバーたちは「難民を取り巻く社会の状況を良くすること」という大きな第2の目標を設定し、早速それを積極的に行動に移そうとした。しかし、物的な支援を行うとなると高校生が自力で実施するのは相当難しい。一方、難民支援を多角的な視点から知るほど、セッションメンバーたちは、物資を送るという直接的な方法だけでなく、このようなグローバルイシューを広く若い世代に伝えていくことの重要性に気づいた。そこで、彼らは「アウェアネス・キャンペーン (Awareness Campaign)」という活動に取り掛かった（この活動については後述する）。
- 4 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等
実施日は、基本的に毎週水曜日放課後16時～17時。必要に応じ金曜日の放課後にも活動することがある。実施期間は2020年7月～2021年現在も活動継続中。活動場所は主に純心女子高等学校・英会話教室および学習室だが、プレゼンテーションの際には大きめの教室やホールを利用

することもある。取り組みへの参加者は、高校Ⅱ～Ⅲ年英語コースの有志6名程度。

経緯・・・2020年の夏頃に、生徒2名と教員2名（カナダ人ネイティブ教員と担任の英語教員）が、週一回、放課後に上述の **English Speaking Session** を始めた。Speaking と銘打っているが、このセッションは単に英語を話すためのものではなく、生徒たちが視野を広げ、国際的な問題となっている諸課題のことをよく知り、高校生として何ができるのかという意識を深めていくことが最も重要な柱となっていた。以下、まずは项目的に述べる。

- ①世界に数ある諸課題の中から、「シリア難民問題」に焦点を当てる。
- ②教員の指導の下、まずはこの問題の理解のために必要な最低限の知識や当該地域の社会情勢およびその問題に関わる国々の動向や思惑等についての情報を収集する。
- ③調査・研究の方法を考え、それに則ってさらに理解を深める。セッションメンバーが増えたこともあり、それぞれに役割を分担し、それらを持ち寄りつつ検討を重ねる。
- ④獲得した知識や当該問題に関する自分たちの考えをプレゼンテーションにまとめ、発表する。
- ⑤地球に生きるひとりの人間としてこれらの課題を自分事として捉えたのち、自分たちのできることを考え、行動に移すことができることは何かを追求する。

ここから、以上の①～⑤について、工夫した点や配慮した点について詳細に説明する。

①について。昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大が世界の主要な課題となったが、その影響を最も深刻な形で受けた世界の人々のことを、セッションメンバーはネイティブ教員との会話などの中から知ることとなった。ローマ教皇フランシスが発信する情報の中にも、中東やその他世界各地の難民たちが置かれている状況がいかに苛烈であるかを人々に伝えようとするメッセージは多い。本校はカトリックミッション校であることから、世界に視野を広げることの重要性は生徒たちにも十分に涵養されている。

②について。多くの日本人にとって中東は地球の裏側の遠い地域である。そこで最初は、当該地域の民族・宗教・言語などの基礎知識を身につけることから始めた。そのうえで、この10年近くに及ぶ内戦が単にシリア国内の問題に起因しているのではなく、歴史を含め世界情勢を正確に掴まないならば、その真の理解につながらないことに生徒たちは気づいた。その調査・研究においては、ネイティブ教員の準備するレジュメや、生徒ひとり一人が所有している個人端末が大変役立ち、生徒たちは急速に理解を深めていった。個人の持つPCはそれぞれ調べ物をするだけでなく、情報の共有などにも大いに活用されている。ちなみにネイティブ教員が準備する地域事情や難民問題に関するレジュメはすべて英語で書かれ、それを基に適宜実施されるレクチャーもすべて英語でなされたが、生徒たちは必死に食らいついていった。知らない表現は意欲的に身につける努力も重ねた。

③について。セッションメンバーが少しずつ増えてきたことにともない、ペアでの作業が増えた。これによって、各人は自らの調査・研究方法の方向性・妥当性などについても考えを深められるようになった。すなわち、対話をしつつ、より高みを目指すといった弁証法的な学びの必要性に気づき、独善的な見方に陥ることを回避しようとする姿勢が鮮明になってきた。

④について。「シリア難民問題」のような複雑で、日本人にはあまり馴染みのない問題について、聴衆にいかにわかりやすく伝え、質の高い発表を行うかは、セッションを始めたところからの大きな課題であった。そこで、メンバーたちは、調査・研究および自分たちのできることをパワーポイントにまとめる際に、プレゼンテーションの基本的な論理構成を活用するという工夫をした。具体的には、その工夫としては、聴衆の関心を高めるための的確な疑問文の挿入や、数字の提示方法、論理的なスライドの構成、自分たちの考えを正確に伝えるための言語表現（日本語および英語）等、多岐にわたる。この作業の際にも、メンバーたちは自分たちで対話を重ねる中でスライドの内容や構成などにさまざまな工夫を重ね、聴衆によりわかりやすく伝えるには何をすべきなのかという問いに正面から向き合ってきた。くわえて、より多くの人に発信する手段として英語による発信にも思いが至り、日本語および英語の2言語による発表

を目指し、実際、自分たちのクラスの「英語表現Ⅱ」の授業の中でプレゼンテーションを実施した（2021年3月）。

⑤について。この研究大会のテーマ「今、この時代に、世界に目を向け、何ができるのかを考えよう」に則って、高校生ができることは何かを前にも増して一層真剣に考えている。このような真摯な姿勢が「アウェアネス・キャンペーン（Awareness Campaign）」という活動へと結びついた。コロナウイルス感染症が収まりきらないなか、ESSメンバーたちはまず自分たちの足元から始めようと考えた。同じ学校の中には、世界の難民問題などには関心を持っていない生徒も多く、そのほとんどは知識としても何も知らない。これはグローバルな世界に目を向け、今、何ができるか考えるという姿勢からはあまりに隔たっている。このことに深刻な問題を感じたメンバーたちは、シリアおよび世界の難民に関する2分ほどのショートムービーを制作し、それを軸に生徒たちにこのようなグローバルイシューを知らせることとした。この「アウェアネス・キャンペーン」の詳細と成果は次項「成果」で述べる。

- 5 成果・・・上項5の④および⑤で簡単に説明したが、特に先月実施したばかりの「アウェアネス・キャンペーン（Awareness Campaign）」については詳述したい。

7月12日には30分間ロングバージョンのプレゼンテーション（基本的に英語をベースとした発表であるが適宜補足的に日本語も使用する）、同13日・14日には5分間ショートバージョンのプレゼンテーションを、関心のある生徒を対象に実施した。ロングバージョンはグローバルイシューへの関心が高いだけでなく、英語を使って情報収集をしたり、より多くの自分たちの考えを発信したりすることにも挑戦したいと考える高校生を対象とした。一方、ショートバージョンのプレゼンテーションは、世界の諸課題にほんの少しでも関心を持ってもらいたいというメンバーたちの考えから生まれた企画であり、英語力がまだ十分でない中学生にも理解できるような内容とした（本校は中高一貫校である）。

このような難しい世界の課題に自分たちが真摯に向き合うことがいかに必要なことであるかがわかり、それを起点に自分が行動することを学んだセッションメンバーたちは、もはや教員からの指示を待つことなく、新しい課題を自ら発見し始めている。実際、3月末にはセッションメンバー全員が集合し、それぞれが新たに見出した世界の諸課題について英語でまとめたものを発表し合い、学びを深めた。具体的には、BLM運動や世界各地に見られるさまざまな差別、LGBTQの問題など多岐に亘り、今後もそれぞれの学びを広げていくことを確認した。この調査・研究は現在進行形のものとして、まさにメンバーたちが格闘している諸課題ではあるが、一方、このような学びは高校生活の中で完結するものではなく、今後進学し、専門性を身につけたのち、グローバリゼーションが進展する現代社会の中でひとりの社会人として生きていくうえでも、生涯にわたり貴重な財産となり、より多くの人々と協働する基盤となることが大いに期待される。

- 6 今後の展開、展望・・・現在、セッションメンバーはすべて高校3年生の受験生であり、受験勉強のために多くの時間を割かねばならない状況ではあるが、このセッションでの学びを、現在の高校生活ばかりでなく、上級学校に進学してからの学びの深化へと繋げていけるように日々努力を重ねている。同時に、自分たちが学び得たことを、若い世代をはじめ多くの人々に伝えていくことの重要性を痛感しており、どのような情報発信の手立てが有効であり、難民問題がいかに切実であるかを若者に実感させられるかについても真剣に議論している。まずは自校内で実施した「アウェアネス・キャンペーン」もその一環ではあるが、より多くの若い人たちとの交流も今後は視野に入ってくるかもしれない。

また、日本語と英語による情報発信にくわえ、多言語による情報発信にも取り組める可能性もあると考え始めている。日本語および英語以外の言語による発信は、単により多くの人々に伝わるようにという考えからだけではなく、世界は多様性に満ちており、それを押し潰すような巨大な力に対抗する手段として諸言語が有効であるのではないかという思いもある。

カトリックミッション校で学ぶ者としてメンバーたちは、毎年クリスマスにローマ教皇がヴァチカンより世界へ送るメッセージを心に留めている。2020年12月25日の教皇フランシスは、内戦が続く中東のシリアをはじめ世界各地の紛争や人道危機にも触れ、「子どもたちに目を向けよう」とも話され、世界平和のため私たちが果たさねばならない役割にも言及された。ローマ教皇フランシスが世界中に訴えかけ続けている「世界各地の難民たちの窮状をみなで理解し、ひとりひとりの小さな力を世界の大きなうねりにしていく」—これを、この **English Speaking Session** の新たな展開・展望としたい。世界の人口の約1%が住む場所を離れなくてはいけない世界の現状を、まずは多くの人々に知らせることは若い高校生でもやれるのだとセッションメンバーたちは確信し、力強く前に進もうとしている。

These are some of the slides that ESS (English Speaking Session) members created for their presentation. They presented their researches and thoughts to our students several times, using these slides and videos. Mostly, they do their presentation in English, using videos with Japanese subtitles.

This is an opening slide:



They learned a lot about a proxy war and complicated international conflicts in Syria:



Making impressive presentations and thinking critically should be based on the facts:

【CURRENT SITUATION OF REFUGEES】

※難民の現状

1 : Syria (6.3million people)

2 : Afghanistan (2.62 million people)

3 : South Sudan (2.44 million people)

4 : Myanmar (1.11 million people)

発表 6

タイトル Diversity & Discrimination ～全ての人が笑顔で暮らせる世界を目指して～

学校名 福井県立福井商業高等学校

発表生徒氏名 西口旺成（にしぐち おうせい）

1 発表を通じて伝えたいこと

SNSの利用が不可欠となりつつある世の中で、誰もが安全に安心して過ごすためには、相互理解を深め、偏見にとらわれず、一定のルールを共有することが必要である。また、ヘイトスピーチやネットいじめが及ぼす悪影響を十分に理解するための教育や機会を整備する必要がある。

2 実施日・期間

台湾の彰化縣にある私立達徳商工職業高校訪問（2019年12月）、ネットいじめに関するリサーチ（2021年2月）

3 主な実施場所

オンラインによる討論会及び台湾の達徳商工職業高校との交流

4 取り組みの参加者及び人数

オンライン討論会 15人、地元の福井県内中学校教師へのアンケート 100人、台湾の高校生との交流 約50人

5 課題発見・動機など

今日、世界では「ヘイトスピーチ」が大きな課題の一つになっている。

これまで多くの活動家がジェンダー差別に対する解決策や考えを発言しているが、現状では依然として解決されていない。また、最近の事例を挙げると、アメリカでは黒人に対する差別的な言動や行動が深刻化しており、“Black Lives Matter”をスローガンに掲げ、抗議デモが続いている。また、コロナ禍において欧米でのアジア人に対する差別も起こっている。この他にも、国や地域によって、それぞれにヘイトスピーチに関する問題を抱えている。

日本では、スマートフォンやパソコンを使い、インターネット上で特定の人物や団体に対し、大人数で攻撃的な書き込みをする、いわゆる誹謗中傷・ネットいじめが深刻化している。通信技術のテクノロジーが向上したことにより、匿名機能の実現など便利化が進む一方で、他人を傷つけやすいネット環境になりつつあるのも事実だ。

私は、この世界の現状をニュースや新聞などを通して知る中で、これらの問題は大変深刻で早急に解決すべきであると考えた。今やグローバル化が進み、人々が国と国を頻繁に行き来する世界となってきている。インターネット上ではさらにその傾向が強く、国境のない状態と言える。今後も他国・多人種の人と関わる機会が増えていく中で、ヘイトスピーチを生み出さないためにはどうすべきかを考えるため、このテーマを設定した。

6 目標・ねらい

ヘイトスピーチの解決策にあたりどのようなことが大切になるのか、学校教育の現場を始め、現在このような状況について考える環境が整っているのかについて、自らの異文化 交流体験や中学校教師へのアンケート調査、他者との意見交換に基づき提示したい。

7 具体的な取り組み内容・工夫・配慮した点

(1) 台湾の達徳商工職業高校への体験入学・交流、香港での生活

1人で台湾の達徳商工職業高校に訪問し、一緒に授業を受けるなど現地の高校生と交流した。授業において、私は地元の福井県のことを紹介し、彼らは台湾について紹介した。また、私は、小学生の時、香港に3年間在住し、インターナショナルスクールに通っていた。その中で、自分とは異なるルーツを持つ人たちと意思疎通を図るにはどうすればよいかを考えた。

(2) 日本国内での「ネットいじめ」の現状に関する調査

福井県内の中学校3校、合計100名の教師に依頼し、学校でのネットいじめ教育の是非に関するアンケートを実施した。また、Zoom（オンライン）を使い、福井県内外の大学生や高校生に対しディスカッション形式の授業を行った。彼らへのプレゼンテーションや話し合いを通じてフィードバックを受けた。これらをもとに解決策を模索した。

8 成果

異なるルーツの人と意思疎通を図り相互理解を深めるには、まずは、自分や自国のことを理解した上で、相互理解を図ることが大事だと感じた。人間はひとりひとり性格や考え方が違うため、第一印象や固定概念などの断片的なことだけで他人を理解することは困難である。例えば、肌の色、出身国だけで人を判断することは間違っている。大切なことは、自己と他者との違いを認め、その上で自己について相手に伝えることである。

また、オンライン討論を終えて感じたことは、現代の学生のネットいじめに対する理解度の低さと危機感の欠如である。良かった点は、他者と意見交換をすることで新たな理解を深めることができたと感じた学生が多かったことだ。一方、中学校教師へのアンケートでは、生徒がネットいじめに巻き込まれることに危機感を抱えている先生方が大多数であったが、学校の教育としてネットいじめ防止の啓発や注意喚起の教育は現状では行っていないということが分かった。

これらのことを踏まえて、私がヘイトスピーチやネットいじめの解決策として最も有効で ありと考えたのは、教育カリキュラムにそれらを取り扱う授業を取り入れるということだ。何よりもまず現状を知ることが大切だ。また、授業の方法としては、ディスカッション型が良いと考える。コミュニケーションは、相互理解の方法を知るために必要であるからだ。

9 今後の展開や展望

将来、私は海外の大学の国際系の学部に進学し、世界各国の課題についてさらに深く学び、これからの世代を担う私たちに何ができるのかを考案したい。SDGsで掲げられている17のテーマを現実にするためには、私たち若い世代がどう変化に対応していくかが重要である。

教員による研究発表

教員による研究発表 発表者一覧

発表者	都道府県	学校名	演題
田中 克佳 (商業科)	愛知県	愛知県立 杏和高等学校	外部資源を活用した 持続可能な地域社会を目指して －新学習指導要領の理念を踏まえた 社会に開かれた教育課程の実践－
山本 孝次 (英語科) (国際理解)	愛知県	愛知県立 刈谷北高等学校	学校設定科目「国際理解」における 持続可能な社会の創り手育成 ～英・社・理のティームティーチング による Soft CLIL 型授業の実践～
石森 広美 (英語科)	宮城県	宮城県 仙台二華高等学校	グローバルな課題研究・論文の指導と 評価について －国際バカロレアの EE を参考に－
三宅 孝徳 (地歴公民科)	兵庫県	兵庫県立 洲本実業高等学校	持続可能な未来に向けて 世界を共に考える授業 －ネパールに電気を届ける方法を探る－

発表1

タイトル 外部資源を活用した持続可能な地域社会を目指して
－新学習指導要領の理念を踏まえた社会に開かれた教育課程の実践－

学校名 愛知県立杏和高等学校

発表者 田中 克佳 (教務主任、商業科)

発表概要

1 本校の概要説明

(1) 系列名の変更 (令和3年度から)

ア 国際理解系列 ⇒ 国際コミュニケーション系列

イ 福祉サービス系列 ⇒ 福祉・医療サービス系列

(2) 科目の新設 (令和3年度から)

ア 『プラクティカルイングリッシュⅠ～Ⅲ』(就職希望者向け、日常英会話講座)

イ 『ビジネス英語Ⅰ、Ⅱ』(商業科の全商英語検定を英語科も協力して指導)

(3) 学校設定科目 (英語科、一部抜粋)

ア 『異文化理解』(海外の文化を調査、JICAから外部講師招聘)

イ 『第二外国語入門』(ネイティブの先生が1年を通じて韓国語を指導)

2 SDGs 持続可能な地域社会を目指して～教科等横断的な授業での取組～

【令和2年度愛知県産業教育振興会教員論文 優秀賞受賞作品】(資料別添)

(1) 稲沢市PR戦略の研究

外国人観光客等のインバウンドを含む多くの観光客の増加を目指して

(2) AIとの共生と超高齢社会を見据えて

(3) 食品ロス削減及びぎんなんの食料自給率向上を目指して

3 本校における国際理解教育に関する取組

(1) 内閣府・JT B主催令和2年度クールジャパン高校生ストーリーコンテスト最優秀賞受賞
訪日する外国人観光客に地域の魅力について旅行プランを作成して提案

「アニメ好きな訪日外国人に向けた体験型スクールツアー」

(2) 愛知県高校生海外チャレンジ促進事業

平成27年度にイタリア、平成28年度にアメリカへ語学留学

愛知県教育委員会の事業で、費用は愛知県が負担

(3) English Cafe

不定期でALTとの英会話教室を実施 (初級・中級コース)

(4) 長期留学生の受け入れ

毎年AFSから長期留学生 (1年間) を受け入れ、本校生徒宅でホームステイ

(5) 韓国京畿道高校生訪問団の受け入れ

令和元年7月、韓国京畿道の高校生15名と学校交流

※授業交流 (調理実習、英会話)、昼食会、体験交流 (お茶会、福笑い)

4 今後の展望、まとめ

外部資源を活用した持続可能な地域社会を目指して
—新学習指導要領の理念を踏まえた社会に開かれた教育課程の実践—

愛知県立杏和高等学校 教諭 田中 克佳

はじめに

平成17年4月、稲沢市と祖父江町及び平和町が合併し、新たな市として動き始めた。時を同じく、祖父江高校と平和高校が統廃合され、尾西地区唯一の総合高校として本校が誕生した。稲沢市は、ぎんなんを始め多くの特産品が存在するとともに、長閑な景色が広がる自然豊かな街である。一方で、若者の東京一極集中や超高齢社会を迎え、この地域でも地域格差が拡大していくことが懸念されている。そこで、持続可能な地域社会を目指した街づくりについて研究し、その具現化に向けた社会に開かれた教育課程の編成について学校全体で取り組むこととした。

1 本校における商業教育

本校では、創立時より7つの系列（科目群）を設けており、うち2つが商業に関する系列である。商業科の特色については、本校で年4回実施している学校説明会において、学習展示室や個別相談会などを通して、丁寧に説明を重ねてきた。その結果、本校生徒の20%超が商業（情報）科目を選択し、高度な資格を生かした国公立大学への入試を始め、地元企業への就職まで幅広い進路を実現することができている。そこで、昨夏より商業（情報）科の授業において、平成30年度から導入した「アクティブ・ボード」（以下、ボード）を活用し、AI（人工知能）やIoTの活用、食品ロス削減など持続可能な社会を目指して、①稲沢市の実態調査、②地域創生の研究をするとともに、商業科目の更なる魅力向上を目指した授業づくりに取り組み始めた。

【本校の系列及び科目群】

No.	系列名（科目群）	属する科目（令和2年度入学生、一部抜粋）
1	ビジネス系列（図1）	簿記会計講義、商品開発、販売実務、秘書実務など
2	情報活用系列（図2）	情報リテラシーA・B、プログラミング、OA実習など
3	人間探究系列	小論文、現代語、古典A・B、教養社会、精選日本史など
4	自然探究系列	看護数学、医療生物、地球環境、危険物取扱講座など
5	国際理解系列	異文化理解、第二外国語（ハングル）、英語表現I・IIなど
6	ライフコーディネート系列	栄養、服飾、子どもの発達と保育、リビングデザインなど
7	福祉サービス系列	介護福祉基礎、ウェルフェア、障害者理解、社会福祉基礎など



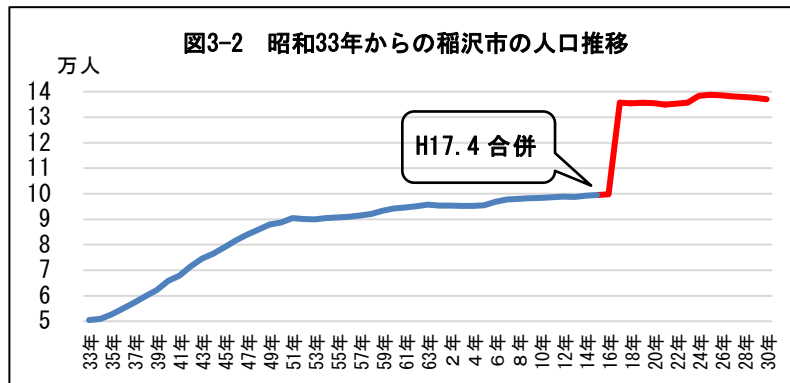
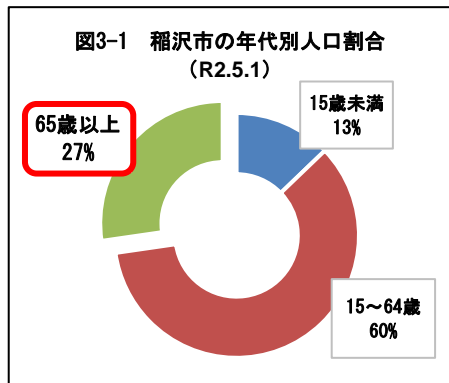
図1 ビジネス系列のグランドデザイン



図2 情報活用系列のグランドデザイン

2 稲沢市の実態調査（3年『ビジネス情報』）

この授業では、稲沢市の人口やイベント来訪者数について実態調査を行った。市の人口は、約136,500人（R2.5.1現在）、65歳以上が約37,000人と4人に1人を超える割合（図3-1）であることが分かった。また、本校が位置する祖父江町の人口は約20,800人と市全体の15.3%であることに危機感を抱いた。中でも、本校では毎年約8割の生徒が市外に進学しており、この状況が続くといずれ大幅な人口減少を招き、市全体の高齢化に大きな影響を与えることが想定される。一方で、平成17年4月の合併を機に、名古屋市のリットタウンとして都市開発が急速に進み、JR稲沢駅周辺に新たなマンションが次々と建設され、転入者が増加してきたことも分かった（図3-2）。さらに、来訪者数が25万人を超える地元のイベントが複数あることも発見でき、これらの結果を基に地元からの人口流出を防ぐための魅力ある街づくりへの方策を各授業で考察した。



【稲沢市の来訪者数上位イベント】

実施月	イベント名	内 容	前回来訪者
11月	そぶえ仔ゆ黄葉まつり	11,000本のイチョウ、ライトアップ	259,450人
2月	国府宮はだか祭り	国府宮神社、1300年以上の行事、厄落とし	259,000人
8月	稲沢夏まつり	市民団体企画・運営、打ち上げ花火多数	56,000人
6月	稲沢あじさいまつり	各種アジサイ約90種、1万株が植栽	54,000人
4月	いなざわ植木まつり	国府宮参道、植木・盆栽のセリ市	41,000人
3月	いなざわ梅まつり	愛知県植木センター、梅の木104種200本	25,000人
4月	稲沢桜まつり	国府宮参道周辺、写生大会、ライトアップ	8,000人
10月	サンドフェスタ	砂の造形展、サンドアート体験、宝探し大会	中止

3 持続可能な地域社会を目指して

(1) 稲沢市PR戦略の研究（3年『情報の表現と管理』、『経済活動と法』）

各授業では、稲沢市PR戦略の研究に向け、市への意識調査を行った。平成19年、稲沢市では翌年に市政50周年を迎えるにあたり、マスコットキャラクター「いなっピー」が誕生した。（一社）日本ご当地キャラクター協会のホームページによると、全国各地にご当地キャラが多数存在しており、思考を凝らした作品が紹介されている。PR手法には、マスコットによるものを始め、メディアを利用したパブリシティなど多様な方法があり、いかに効果的なものを用いるかが鍵となってくる。本校でも、オリジナルキャラクター「杏ちゃん」を用いたLINEスタンプの制作・販売（図4）、全校生徒からデザインを募ったクリアファイルの制作など様々なPR活動を行っ



図4 本校のオリジナルLINEスタンプ

ている。なお、スタンプの売り上げ代金はすべてJRC部を通して福祉団体に寄付している。そこで、これらの活動を基に市のPR戦略について、授業でボードを活用してアイデアを出し合った。アンケートは、質問の表現方法や選択肢の順序を何度もシミュレーションし、完成させることができた。コロナ禍による休校期間が終了した6月上旬、全校生徒700名超に対してアンケートを行った。以下は、結果の一部である。特産品については、ぎんなんが94.5%（618人）と多数を占め、圧倒的な認知度の高さであることが分かった（図5）。また、いちご大福や大鏡もなかと答える生徒も少数ではあるがみられた。今後、この認知度を生かしたPR戦略を研究し、さらに効果的な市のPRに向けて、特産品の商品開発にも繋げていきたい。

また、観光名所については、国府宮神社366人（51.7%）、イチョウ並木260人（36.7%）と二つで約9割を占める結果となった（図6）。特に、市内の小・中学校では、はだか祭り（2月下旬、国府宮神社）当日は毎年休校措置をとっていることを知り、市民の祭りへの関心の高さを感ずると同時に、伝統ある祭りの継続・発展に向けた策を講じる必要を強く感じた。

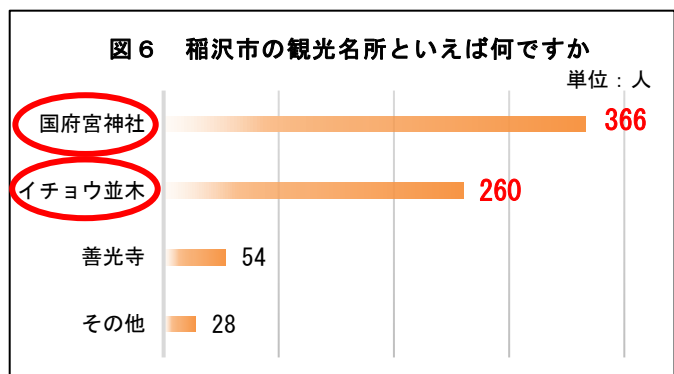
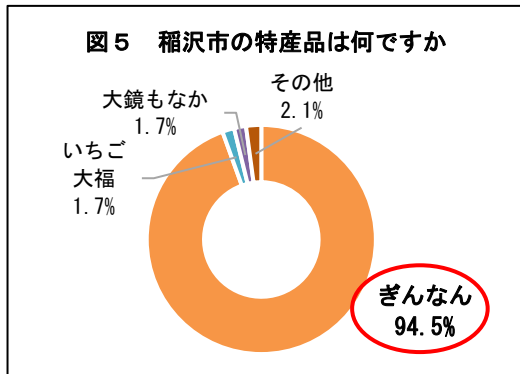


図7 アンケート集計作業の様子



図8 ボードを用いた結果報告の様子

(2) AIとの共生と超高齢社会を見据えて（3年『販売実務』、『ビジネス情報』）

授業では、超高齢社会（高齢化率21%以上）を生き抜くための地域活性化策について、3～4人の班で具体案を出し合い、その方策についてアイデアをまとめて発表を行った。中でも、各班から評価が高かった作品を一つ紹介する。内容は、特産品のぎんなんの実が生るイチョウ並木（祖父江町）を生かした「銀杏ロード」（図9）の整備案である。2025年（令和7年）には、3人に1人が65歳以上の高齢者になることを受け、高齢者が自身で健康的に散歩できるようAIとの共生を考え、セグウェイを有料（地域ポイントや電子マネーなど）で貸し出し、自由に散歩できるように考えた。この班では、観光客を呼び寄せるために新たな施設を建設するのではなく、今ある資源を有効活用することで設備投資のコストも抑えられ、実行性の高い対策を考案したことが多くの評価を得た。

今回の取組では、素晴らしいアイデアが数多く出され、本校は地元から入学する生徒が多いこともあり、



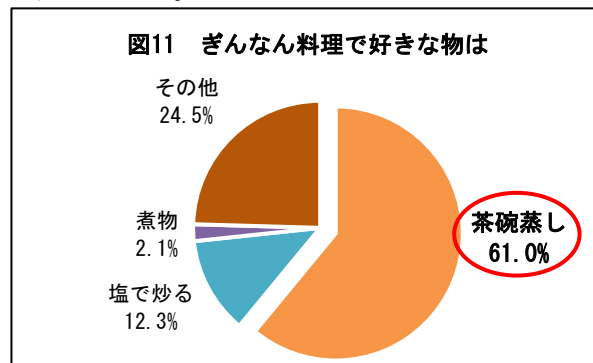
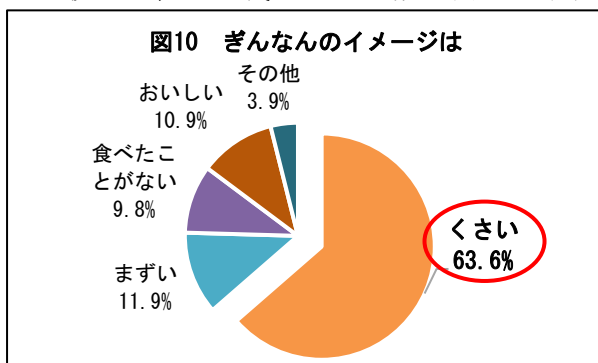
図9 AIとの共生「銀杏ロード」

どの作品も地元愛に溢れていた。授業では、地方創生について教員がファシリテーターとして課題を投げかけ、班ごとで話し合いを重ねていったが、今後は生徒が主体的に課題を設定し、対策案を生徒同士で対話できる授業づくりを計画していきたい。

(3) 食品ロス削減及びぎんなんの食料自給率向上を目指して（3年『経済活動と法』）

「愛知県SDGsガイドブック」（発行：愛知県）によると、日本の食品ロスは年間643万トンに上っている。授業では、食品ロス削減及びぎんなんの消費量向上を目指し、全校生徒に調査を行った。ぎんなんのイメージや好きな調理法について質問し、普及に向けたアイデアを募った。以下は、その結果の一部である。イメージは、『くさい』が63.6%と6割を超えており、特産品と認知されている半面、改善策を講じることが急務であると感じた（図10）。

また、好きな調理法は、『茶わん蒸し』が61.0%と仮説どおりとなった（図11）。結果を受け、教科等横断的な視点から他教科・学年とも連携を図り、①イメージの改善策、②新レシピの考案を行うことで、食品ロス削減とともに食料自給率の向上が期待できると結論付けた。さらに、動向調査資料 No. 175 「農業の動き2020 資料編」（発行：愛知県）によると、市の出荷額は約2億円（294t）で全国シェア約33.3%（H30）を占めており、県内には①ういろう、②こんにゃく、③もなか等のぎんなん加工品も開発されていることも分かった。今後は、若者をターゲットとしたぎんなんスイーツの開発に加え、殻の再利用法についても研究し、学校全体で環境保全に視点を置いた食品ロス削減に向けた取組を目指していく。



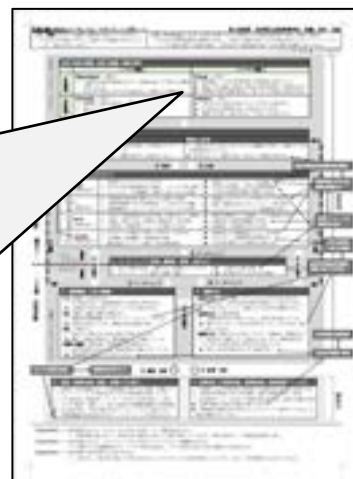
4 カリキュラム・マネジメント（CM）分析結果を踏まえた教育課程の編成

これまでの取組を踏まえ、平成29年度から2年をかけて完成したCM検討シート及び分析シートの集計結果を基に、平成31年1月に現職研修としてクロスSWOT分析を全職員で行った。研修では、本校の強みと弱みを内部環境と外部環境の要因ごとにKJ法を用いて書き出し、強みを生かしてさらに伸ばす方策、弱みを補強しチャンスに変えるための方策について10班（5～6人）に分かれ、闊達に意見を出し合った。参加者からは多くの建設的な感想が聞かれ、大変有意義なものとなった。この結果により、様々な視点からの本校に対する「見方・考え方」を知ることができ、新教育課程編成のうえで大変参考となる意見をまとめることができた。

以下の表は、研修で作成したクロスSWOT分析の集約結果（図12）と教科主任会や教科会で議論を重ねて完成した令和4年度入学生の教育課程（商業科目のみ抜粋、図13）である。本校の育てたい生徒像について、全職員で話し合った結果を基に他教科の協力も得つつ、商業に関する幅広い知識を身に付けさせることを目指して編成することができた。新任の頃、初任者研修において「教科書を教えるのではなく、教科書で教えること」と何度も指導されたことが脳裏に焼き付いている。20年以上経った今でも、学校教育に大切なものは型だけではなく中身であると確信している。教務主任として5年目を迎え、全職員で作り上げた新しい教育課程をどのように運用していくかが今後の重大な責務であり、令和4年度の入学生を迎えるまでに検討を重ねていく。

図12 本校のSWOT分析結果 (H31.1.24 実施)

クロスSWOT分析 GW結果 (H31.1.24 現職研修)		外部環境	
		Opportunity (機会) ○ 学校周辺は長閑で環境がよい ○ 地元中学出身の生徒が多く、地域からの信頼も厚い ○ 学校行事が多く、満足度が高い	Threat (脅威) ▲ 携帯、スマホの使用時間が多く、睡眠が少ない生徒が目立つ ▲ 家庭教育との連携 (多様な生徒や保護者への適切な対応)
内部環境	Strength (強み) ○ 生徒は素直で心やさしい ○ 日頃から挨拶できる ○ 相互扶助の精神が強い	① 積極戦略 ・学校説明会での生徒の積極的活用 ・地元の各種イベントへ積極的参加 ・0の日立ち番、防犯パトロール ・学校内外のクリーンアップ活動	② 差別化戦略 ・保護者会で学習・生活状況を集約したプリントの配付・教室掲示 ・若手教員の育成、保護者に対してチームで丁寧な対応をする。
	Weakness (弱み) ▲ 人前で話すことが苦手 ▲ 精神的に弱い生徒が多い ▲ 学習意欲が低い生徒がみられる	③ 改善戦略 ・全系列の授業による総合学科発表会の内容充実・発展 ・SC、保健室の積極的な利用 ・系統的な学力診断テストの実施	④ 回避防衛・縮小撤退 ・授業で発言する機会を多く設定 ・効果的なスマホ時間の削減対策 ・チームで保護者と丁寧な対応 (ホウ・レン・ソウの徹底)



本校のCM分析結果

図13 完成した令和4年度入学生の教育課程 (商業科のみ抜粋、太字：新設)

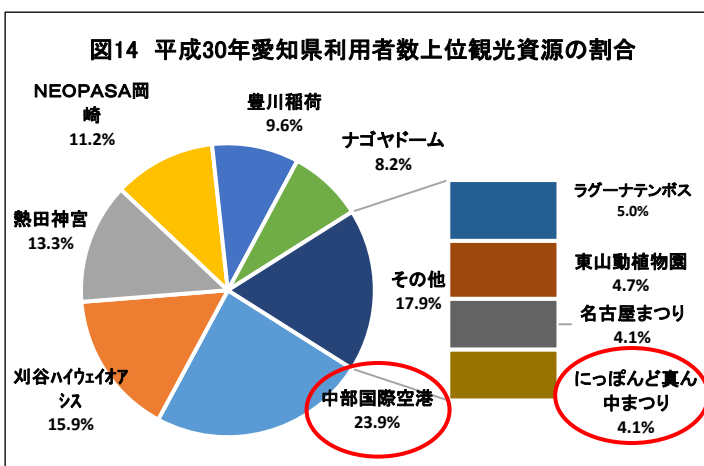
学年	開講科目一覧 ※ () 内は単位数	備考
1年	★簿記 or ☆情報処理(4)	4h
2年	★簿記会計講義(4)・財務会計Ⅰ(4)・原価計算(4)	最大 12h
	☆ソフトウェア活用 or プログラミング(4)・ 情報リテラシー (4)・ 情報テクノロジー (4) ◎ビジネス基礎(4)・ビジネスコミュニケーション or 情報の表現と管理(2)・ サービスマインド or ビジネスマナー (2)・ 簿記 or オフィススキル or マーケティング and ビジネス法規(4)	
3年	★財務会計Ⅱ(4)・管理会計(4)	最大 14h
	☆基本情報講義(4)・ソフトウェア応用 or アルゴリズム入門 (4) ◎総合実践 or ビジネス基礎(4)・ 財務会計Ⅰ or ソフトウェア活用 (4)・ サービスマインド or ビジネスマナー (2)・ オフィススキル or 商品開発と流通 or 観光ビジネス(2+2)	

【注意事項】

- ※1 ★☆の科目を2・3年次に選択するには、1年次に同じ記号の科目を選択すること
- ※2 3年次に◎■▲の科目を選択するには、2年次に同じ記号の科目を選択すること
- ※3 **全商英語検定は、2年『実践英語Ⅰ・ビジネス英語Ⅰ』(英語科)で担当する**

5 今後の課題

観光レクリエーション利用者統計(発行:愛知県)によると、平成30年の統計データ(図14)では、中部国際空港(セントレア)が約1,278万人で第1位となっており、以下刈谷ハイウェイオアシス、熱田神宮と続いている。稲沢市内では、第17位に尾張大國霊神社(国府宮神社)が約137万人であった。注目すべきは、第10位に約221万人で**にっぽんど真ん中まつり**(団体でのダンス対決)がランクインしていることである。有形施設が大半を占める中、無形のダンスイベントがこれだけ多くの若者を中心とした人々を集客できる点も大いに参考していきたい。愛知県の人口は約754万人



(R2.4.1 現在)であり、この数値からも外国人観光客等のインバウンドを含む多くの人々が本県を訪れたことが分かる。さらに、令和元年8月、知多半島の空港島に愛知県国際展示場「Aichi Sky Expo」がオープンし、さらなる経済の中心地として発展していくことが期待されている。

総合学科では、毎年生徒に対して科目選択の希望調査を行い、履修科目を決定している。本校では、年間約130単位(約14%)の商業(情報)科目を開講しており、長年高い割合を維持し続けている。商業高校においても、産業教育、特にビジネスの魅力を生徒に伝えていくとともに、地元の地域活性化に資する人材の育成と確保をしていかなければならない。長年行われてきた学科単位の指導の枠を超え、広い視野に立って相互に連携した取組を発展させるとともに、100年に1度の大改訂といわれる新学習指導要領(H30.3告示)での鍵となる「教科等横断的な取組」をシステム化し、産業教育の発展に努めていく必要がある。さらに、AIやIoTなど情報通信技術の進展に伴い、society5.0の新しい社会が提唱され、「よりよく生きるため」に激しい変化の中で感性や思いやり等を生徒に身に付けさせていくことが今後の課題である。

6 これからの商業教育発展を目指して

文部科学省のホームページによると、全国的に商業高校や商業科へ進学する生徒が減少しており、普通科の占める割合(H30.5現在)が73.1%に対し、商業科は5.9%にまで減少している。この状況の中、質の高い教育を維持しつつ、いかに商業教育の魅力を発信し、PRしていくかが喫緊の課題となっている。今回の研究を通して、地元の地域活性化を推進できるとともに、生徒に対して主体的に学ぶ態度を身に付けさせることができ、大変有意義なものとなった。新学習指導要領では、教科等横断的な取組の重要性について触れられているが、学校全体のグランドデザインを作成する前に、商業科の各科目の関連性や指導内容を見直す必要があると新教育課程の編成作業を通して強く感じた。まず、各科目の目標と学校教育目標を照らし合わせ、生徒に身に付けさせたい力について教科の中で共通理解しなければならない。現代の若者は、希薄で物事に無関心と言われているが、このような取組を重ねていくことで少しずつでも地元に関心を持つ生徒が増加し、人口流出を防げると確信している。愛知県は、モノづくり産業が盛んで県外からの来訪者も多い。しかしながら、近年東京や大阪など大都市へ移り住む若者も増加傾向にある。これからの商業教育発展のため、今までの固定観念を払拭し、幅広い視野を持ってその魅力を日々の授業で生徒に伝え、未来のヒトづくりをしていくことが求められる。

おわりに

全国の商業教育を受ける生徒が、大阪商人、伊勢商人と三大商人である近江商人の家訓「三方よし(売り手よし、買い手よし、社会よし)」の精神を継承し、自己の利益のみを考えるのではなく、社会全体の利益を考えることができる社会人となって各地で活躍していくことを心から願っている。今後も商業科教員として、商業教育の不易となる部分を大切に守って次世代へ伝承し、積極的に新たな流れを取り入れつつ、商業教育の魅力を発信し続けていきたい。

【参考文献】

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総則編、商業編 文部科学省
動向調査資料 No.175 農業の動き2020【農業動向編、資料編】 愛知県
平成30年愛知県観光レクリエーション利用者統計 愛知県観光コンベンション局観光振興課
愛知県SDGsガイドブック 愛知県政策企画局企画調整部企画課
稲沢市の観光における現状と課題について(平成29年4月) 稲沢市

発表 2

タイトル 学校設定科目「国際理解」における持続可能な社会の創り手育成
～英・社・理のティームティーチングによる Soft CLIL 型授業の実践～

学校名 愛知県立刈谷北高等学校

発表者 山本 孝次 （英語科、国際理解）

発表概要

新学習指導要領の前文では生徒を「持続可能な社会の創り手」へと育成することが教育の目的であることが明記されている。本実践では、持続可能な社会の創り手を地球規模課題の解決に自ら取り組んでいける人と定義し、トピックに SDGs を設定し Soft CLIL 型の授業を行うことで、批判的思考力と地球市民意識の養成とともに持続可能な社会の創り手育成を目指す。

「生徒をどのような人間に育てたいか」という観点で高校教育あるいは授業について考えたことはあるだろうか。教育の目的は、教育基本法第 1 条に定められているとおり、人格の完成にある。平成 30 年告示の高等学校学習指導要領においても育成すべき資質・能力の三つの柱のひとつとして「学びに向かう力・人間性等の涵養」が掲げられている。しかし、高校教員は大学入試対策に追われ、知識・技能の習得、あるいはせいぜい思考力・判断力・表現力の育成に取り組むところまでで精一杯になっているのが現状と思われる。そのような現状を打破し、現代社会において喫緊の課題である持続可能な社会の創り手育成を目指した学校設定科目「国際理解」での実践を発表する。

本発表における Soft CLIL 型授業とは、単元のトピックとして SDGs を扱い、導入と最後の発信は英語で、内容を深める調べ学習、話し合い等に関しては英語あるいは日本語で行うタイプの学習法を指す。英語の使用量よりも地球規模課題に対する深い思考を促すことを重視し、学習を通して創り出した自分の意見や考え（地球規模課題の解決へ向けた提案など）を世界中の人へと発信し、自分が行動できるような「持続可能な社会の創り手」を育成することに重きを置いている。内容を深く理解するため、人権系の話題のときは英語科と地歴・公民科の教員で 2 名、環境系の話題を扱う時は英語科と理科の教員の 2 名が担当している。クロス・カリキュラムの探究型授業を模索している学校の参考に少しでもなれば幸いである。

発表3

タイトル グローバルな課題研究・論文の指導と評価について
ー国際バカロレアのEEを参考にー

学校名 宮城県仙台二華高等学校

発表者 石森 広美 (英語科)

発表概要

「総合的な探究の時間」や学校設定科目「課題研究」等、高等学校において課題探究の重要性が高まり、各校でSDGsを中心としてグローバルなテーマに基づく探究学習が展開されている。課題設定、調べ学習、情報収集、調査、分析、考察、等を経て、その研究成果をポスターやパワーポイント等で発表したり、またレポートや論文にまとめる、という流れが一般的である。しかし、生徒の任せっきりの学習になっているという批判の声も聞かれる。

研究課題として適切なテーマ(課題)の設定、情報収集の仕方や学問的誠実性等の倫理的ルール等、教員側が研究について注意を払うべき点も多い。また、その評価についても悩ましい。そこで、参考にしたいのが、国際バカロレアの課題論文(EE)である。

本発表では、国際バカロレアのEEのテーマ設定のプロセスを紹介しながら、高校におけるグローバルな課題研究の指導について、考察する。なお、発表者の勤務校は、東北地区の公立学校では初めて、2021年から国際バカロレアを導入する。

発表4

タイトル 持続可能な未来に向けて世界を共に考える授業
ーネパールに電気を届ける方法を探るー

学校名 兵庫県立洲本実業高等学校

発表者 三宅 孝徳 (地歴公民科)

発表概要

高校2年生対象 学校設定科目『時事教養』

<授業意図>

SDGsを用いて世界の諸問題を考える際、生徒たちが国際社会との関わりに気付いておらず、自分事として認識していないことが課題であった。

今回の授業単元では、日常生活で簡単に手に入る身近な電気やガスを教材として扱うことで、日常と世界の繋がりを感じさせるようにしている。その上でSDGsの掲げている目標がまだまだ未達成であり、それがネパールの人々に様々な苦難を引き起こしているかを生徒に認識させる。そして生徒たちは、身の回りにあるインフラや公衆衛生が「当たり前にあるもの」ではないことを理解する。生徒たちにはこれをきっかけとして様々なSDGsの課題について日常の中で興味関心を広げ、グローバルな視点や理解を深めてもらいたいと考え、授業を構成した。

<発表授業内容>

現在、途上国への支援は世界中で多岐に渡り、様々な国や地域の発展に寄与している。その中でも日本のインフラ支援は高く評価されており、ネパールでは、日本が建設した道路や橋などが生活向上の役に立っている。その一方、ネパールに贈られた日本の信号機は使われずに街中に取り残されてしまった。それは信号機がネパールの社会状況と合致しなかったからである。

授業では、ネパールを題材に地理特性や社会情勢を踏まえ、ネパールの最適な電気供給とは何かを議論する。加えて、これら電気の国際協力政策が他のSDGs目標へ波及していくことに気付かせ、総合的な発展途上国への国際協力の在り方を生徒それぞれに考えさせる。

来賓・大会役員・事務局名簿

1 来賓（敬称略）

岡田 恵子	外務省国際協力局審議官
富高 雅代	文部科学省初等中等教育局 教育課程課及び情報教育・外国語教育課 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官・学力調査官
吉成 安恵	独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長
内山 選良	一般財団法人日本国際協力センター（JICE）九州支所長
中村 陽介	長崎県教育庁高校教育課指導主事

2 大会役員

大会参与	中里 真一（全国国際教育研究協議会会長・東京都立北豊島工業高等学校長）
大会会長	奥田 修史（長崎県高等学校国際教育研究協議会会長・学校法人奥田学園 創成館高等学校長）
大会副会長	釘島 正智（長崎県国際教育研究協議会副会長・長崎県立奈留高等学校長）
大会理事	富高 啓順（宮崎県国際教育研究協議会会長・宮崎県立宮崎南高等学校長） 福永 広隆（鹿児島県国際教育研究協議会会長・鹿児島県立錦江湾高等学校長）
全国理事	中村 俊佑（全国国際教育研究協議会事務局長・東京都立五日市高等学校） 高島みゆき（全国国際教育研究協議会副事務局長・東京都立砂川高等学校） 竹山 哲司（全国国際教育研究協議会副事務局長・東京都立六郷工科高等学校） 林 真代（全国国際教育研究協議会副事務局長・東京都立永山高等学校） 吉野 翔子（東京都国際教育研究協議会事務局長・東京都立浅草高等学校） 伊東 望（九州地区国際教育研究協議会事務局長・宮崎学園高等学校）

3 大会事務局

大会事務局長	平山 隆（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局長・創成館高等学校）
大会事務局	武末 智美（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 中村 俊史（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 安武 希（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 戸川 浩（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 斉藤 仁（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 中村 孝子（長崎県高等学校国際教育研究協議会事務局・創成館高等学校） 横田 有（長崎県高等学校国際教育研究協議会・創成館高等学校）

エッセイから広がる未来

6月7日より『JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト』の作品募集が始まりました！

エッセイコンテストは、個人での参加もできますが、学校の学習活動の一環として実践されている例も多く、それぞれの位置付けで活用いただいています。今回は、エッセイコンテストに取り組む学校の先生と、その学校から昨年入賞した生徒に取材し、エッセイコンテストの活用方法や参加した感想をお聞きました。

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに、学校として取り組んでいる興南中学校・高等学校の知念先生に、コンテストに取り組むことになったきっかけやその方法、効果について伺いました。

学校法人興南学園 興南中学校・興南高等学校(沖縄県)について

興南中学・高等学校では、建学の精神「南(沖縄)を興す人材の育成」に基づき、沖縄から日本、そして国際社会へ貢献できるグローバル(global×local)リーダーの育成を目指しています。中高6か年教育の中で、沖縄のもつ独自の文化や特性を深く学び(local)、その学びを日本、そして世界へとつなげていく(global)経験を積み重ねていきます。【Glocal×Local×Leaders～沖縄興南学園の取り組み～より抜粋】



←
実社会の中で課題を探求し
解決策を提案する、
課題解決型の総合学習
「興南まなVIVA」の授業の様子。



1 学校でエッセイコンテストに取り組むことになったきっかけは？

本校には、JICA海外協力隊に参加してナミビアで活動していた教員がいます。その教員からの「JICAのエッセイコンテストを生徒たちの視点の世界に向けたきっかけとして、活用できないか」という提案がきっかけでした。建学の精神である「南を興す」人材育成や、沖縄から世界を引っ張る「グローバルリーダー」育成のために、エッセイコンテストは有効な活動だと考え、学校として取り組むことになりました。

2 エッセイコンテストの応募に向けた、導入や事前学習はどのように構成している？

本校では中学生の全学年を対象に、夏休みの課題として取り組んでいます。特に、初めてエッセイを書く生徒が多い中学1年生には、事前学習として授業時間を1時間使って、5段落エッセイの書き方の講座を行っています。講座では、エッセイコンテストの過去の受賞作品をひとつ取り上げ、みんなで話し合いながらその構成を分析します。段落ごとにどんな書き方をして、一つのエッセイ文章としてまとめているか、どれくらい自分の身近なこととテーマを結びつけているか、といった視点を伝えるようにしています。毎回、エッセイコンテストのテーマは、国際協力や世界についての視点で設定されていて、中学生にとってはなかなか大きなテーマだと思います。そのため、学校や日常から少し離れた時間の中で作文に取り組んでもらうほうが、自分自身の考えが深まるのではないかと考えています。本校から受賞した又吉さんも、夏休みの間に家族で話し合い、考えて取り組んだことを題材に書いてくれました。

3 エッセイコンテストによる生徒の変化は？

生徒たちは毎年エッセイを書くにつれて、文章を書くことが好きになる生徒もいるし、慣れていく生徒も出てきます。もちろんいつまでも苦手だったり、慣れない生徒もいますが、私が強く感じるのは、生徒たちの中にある、文章を書くことに対する障壁がなくなっていく変化です。毎年継続して参加することで、文章を書くコツや取り組み方、作品を書くことの楽しさを学んでくれているのだと感じています。

2020年度JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 中学生の部で
国際協力特別賞を受賞した、学校法人興南学園 興南中学校の又吉詠子さんに、
参加してみたの感想と、エッセイの題材となった体験について、お話いただきました。

学校法人興南学園 興南中学校 2年生 又吉 詠子(とわこ)さん

入賞作品

「一万円の使い道」（又吉さんが作成したエッセイは[こちら](#)）

2020年度 JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 中学生の部国際協力特別賞受賞



夏休み前、一万円をどこかの団体に寄付をしようという父の提案から、又吉さんは「一万円でできること」を調べていきました。その中で世界のことを知り、一万円の価値や自分の暮らしを見つめ直し、途上国の女の子を援助をする団体に寄付を決めた体験について、その時考えたことや感じたことと併せて書かれました。

エッセイで誰かに伝えることで広がっていく



自分の体験をきっかけに、これからもっと世界のことを詳しく知りたい、調べてみたいと思ったので、このテーマでエッセイを書きました。

改めて文章にすると、今私が「あたりまえ」だと思っている生活が、実はそうではないということに気がきました。エッセイの題材を決める時には両親ともよく話して、元々関心のあったジェンダーの問題や差別・偏見といったテーマ、そして特別支援学校の先生をしているお母さんとは、児童養護施設の課題についても話し合いました。今まで気になっているだけで行動に移せなかったことを、自分で調べて、エッセイで誰かに伝えることで、その調べたことが少しでも広まっていけばいいなと思っています。

エッセイの題材になった体験は「身近なものから世界を考える」ことだった



以前から途上国やJICAのことはテレビで見たことがあって、遠い国で困っている子どもたちや、きれいな水が飲めない人たちは、他にどんなことに困っているのかな、と気になっていました。でもその時は、自分から調べようとはしていませんでした。父からの提案をきっかけに、よく調べてみると、一万円で世界の人たちのためにできることはたくさんあるんだ！ということがわかりました。この機会がなければ考えることもなかったようなことを、じっくり考えることができました。例えば世界には、慣習や貧困、家庭内暴力などによって、勉強をしたくてもできない女の子や、自分の意志通りに生活ができない女性がいて知って、性別にかかわらず、みんなが自分の生きたいように生きられたらいいなと思いました。

普段一万円は何か物を買ったらすぐ使い終わってしまうけれど、今までの自分のお金の使い方よりも有意義な方法を学ぶことができました。そこで途上国の女の子を支援する寄付を行うことを決めて、ポリビアに住む8歳の女の子を支援することになりました。この支援はその子が16歳になる時まで続きます。今はポリビアについて自分で調べてみっていますが、これから手紙のやりとりを重ねて、もっとその国のことを知ったり、日本のことも教えてあげたいと思います。

又吉さんから、これからエッセイコンテストに参加しようとしている人へのメッセージ

エッセイコンテストに参加して、ゼツタイ損はしないと思います！

私はエッセイを書く中で、今まで考えたことのないことを考えて、その中でたくさんを知ることができました。

私の将来の夢は獣医になることですが、こうしていろんなことを知る中で夢も変わるかもしれないし、少しでも関心のあることはどんどん調べてみる方がいいと思います。エッセイコンテストはそんなきっかけを与えてくれるものでした。

▼JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストについては[こちら](#)

[概要](#) / [2021年度募集案内](#) / [過去の受賞作品](#) / [エッセイを活用した授業実践事例](#)

エッセイを書くことは、「世界のことを自分なりに考え、文章で表現する」一見シンプルにも思える活動です。一方で、多くの世界の課題には、まだ正解が出ていません。答えのないものを自分なりに見つめ、考え、自分の言葉で発信をすることは、これからの社会を生きる上で、とても大切な要素なのかもしれません。もちろんエッセイコンテストは、中学生・高校生による個人での応募も大歓迎です！皆さんの想いの詰まったエッセイを、ぜひご応募ください！